

アジアの友

The Asia-no Tomo

2-3

FEBRUARY-MARCH

2013

泰日経済技術振興協会（TPA）創立40周年を迎えて
設立と長年の夢の実現 泰日工業大学の設立



日本語学校新校舎 全貌を現す



建設が進められている日本語学校新校舎は、ついに工事用カバーが取り払われ、美しいガラス張りの建物が現れました。3月末の完成までわずかとなりました。

日本語コース大学進学コースの修了式が行われました



2013年3月5日（火）、ABK日本語コース大学進学課程の修了式が駒込地域活動センター（文京区）にて行われました。春の訪れを感じる心地よい晴天の下、90名の若者がそれぞれの未来に旅立って行きました。



アジアの友

2013年2-3月号 第501号

目次

	巻頭
2	泰日経済技術振興協会 創立 40 周年記念式典開催される ・小木曾友 ASCA 理事長の祝辞
4	創立 40 周年を迎えて ～ TPA の設立と長年の夢の実現 泰日工業大学の設立
	Interview
8	ミャンマーのミンウェイさん 47 年振りの ABK 来館！
	歴史
12	「アジア・アフリカの独立と発展に尽した人々」より オン・サン (Aung San)
	Data
18	平成 24 年度 外国人留学生在籍状況調査結果
	Report
23	「ハノイ・ホーチミン訪問記」 立教ベトナムプロジェクト・スタディーツアー 石渡壮介 廣瀬園子
	読者寄稿
29	気仙沼の復興状況 栗原静子
	知友会通信
30	奨学金情報、イベント情報
32	ご入会、ご寄付のご報告 (2012 年 12 月、2013 年 1 月)
33	ABK 同窓生募金 (2013 年 1 月 31 日現在)
39	ABK 関連書籍のご紹介
40	おたより

<表紙> タイ国コーンケン県、Sribunruang (スィー・ブン・ルアン) の郡都の市場 (Photo by K.Mizutani)

泰日経済技術振興協会（TPA） 創立 40 周年記念式典開催される



本誌でも折に触れてその活動を紹介している（財）アジア学生文化協会（ASCA）のタイ国の姉妹団体・泰日経済技術振興協会（TPA）が、2013年1月24日に創立40周年を迎えました。これに伴い去る1月24日にバンコクのシェラトン・グランデ・スクムビット・ホテルで記念セミナーと式典が開催されました。式典はブラユーン TPA 会長のスピーチの後、日本側の姉妹団体である ASCA、海外産業人材育成協会（HIDA：旧 AOTS）、日タイ経済協力協会（JTECS）のそれぞれの理事長の祝辞へと続き、その後は2015年の実現に向けタイでも関心が高まっている ASEAN 経済共同体（AEC）についてのスペシャルディナートーク「AEC と投資」が専門家、企業家を招いて行われました。



式典の様様。写真右端は挨拶をするブラユーン TPA 会長

小木曾友 ASCA 理事長 の祝辞

TPA（泰日経済技術振興協会）創立40周年記念おめでとうございます。昨年7月、TNI（泰日工業大学）の敷地内に穂積五一先生とソンマイ・フンクラトン先生の記念像が設置されましたが、その台座には、「TPAの設立は、タイと日本の深いきづなの上に成り立っているもので、当初の約束に則り、タイの自立と繁栄をめざして進められてこそ、生命があり、発展性があるものと言えましょう。」

（穂積先生「この600年の間の交流で、タイに対する日本人の気持ちの中に亀裂が生じるようなことはほとんどなかったのではないかと思います・・・日本とタイはこれからも永遠に友好国として助け合う」

ここにTPA設立に託したタイ・日両国の人々の深い願いが込められています。

1970年代の初め、TPAを設立するに当たって日本・タイ双方の間で、次のような取り決めが行われました。一つはタイ国のためという目的を遂げるには、タイ国の協会であるTPAの自主性を尊重しなければならないということ。二番目は、タイ国に会館を建設すること。その会館は、技術移転のためのセミナーを開催したり、日本の技術書を翻訳してタイの学校に配るというようなことをするための会館です。3番目に、将来はタイ国に技術学校を建設する。できれば大学も建設したいということが合意され、ここからTPAの活動が始まりました。

TPA会館を建設するために、それぞれ仕事を持っている日本帰りの元留学生・研修生たちは、仕事を終えると、夜、間借りのビルの一室に集まって、本当に夜中まで侃々諤々の議論をやっていました。報酬は弁当だけで何もなし。無報酬で毎日、毎日熱心な議論を繰り返しました。私はその様子を見て、もしこれで日本側の熱意が足りず、先に約束したような、本当にタイの発展のために役立つようなものができなかったからどうなるか。「この人たちの恐ろしいまでの熱意を、もし裏切ったらどういうことになるかと思うと、背筋が寒くなります」という報告書を穂積先生に送った記憶があります。

TPAは、設立以来この40年に目覚ましい発展を遂げ、タイ国の経済・技術の向上に大きな貢献を果しました。そして、2007年6月には、TPAを母体として、当初からの念願であった大学（泰日工業大学）の設立も実現しました。

TPA設立40周年にあたり、改めて関係者すべての皆様のご努力を称え、私の祝辞といたします。



穂積五一先生とソムマイ・フントラクーン先生の記念像

創立40周年を迎えて

TPAの設立と長年の夢の実現 泰日工業大学の設立

今や“東南アジアにおける援助モデルのお手本”とまで言われるようになった泰日経済技術振興協会（TPA）ですが、その設立までには「本当にタイのためになる援助」を実現するための、関係者の並々ならぬ努力がありました。

TPA が産声を上げた時代、1960年代から70年代は日本企業のタイへの第一次進出ラッシュと言われた時代で、大規模な民間投資による工場の新設などが盛ん行われていました。一方で、70年代後半になると、ベトナム戦争特需の終了によるタイへの直接投資の減退、パーツの切り下げなどにより、タイ経済は行き詰まるようになります。こうした中、次第に国民の目はタイで稼ぐ好調な日本企業に向けられ、タイのマスコミは大幅な対日貿易赤字を理由に日本の経済侵略が始まったとまくしたてました。

そして1972年11月、タイ全国学生センターが中心となり日本製品ボイコット運動がタイ全土で展開されます。この運動は当時のタノーム軍事政権打倒運動に発展し、翌1973年10月には軍部が学生のデモ隊に発砲し死傷者を出すという大惨事へと発展していきました。



【スクムウィット本館】 5-7 Sukhumvit Road Soi 29, Bangkok 10110 Tel: +66-2-258-0320 Fax: +66-2-662-1017

こうした時代背景の中、日本政府のこれまでの日本企業の輸出振興を中心に据えた一方的な経済協力とは異なる、民間ベースの経済協力を模索していた通商産業省（現・経済産業省）は、(財) アジア学生文化協会（ASCA）と（財）海外技術者研修協会（AOTS）の理事長であり、留学生・研修生の受け入れを通じてアジアの人たちと深い信頼関係を築いていた穂積五一にこの件の相談をします。

穂積はタイに渡り、アジア文化会館（ABK）同窓会の元日本留学生・研修生たちとこの構想について話し合い、彼らの「タイのためになるタイの自主性を尊重する援助をしてほしい」という強い思いを受けとめ、その実現を約束して帰国します。そして「金を出すのが口も出す」、という従来の日本の経

済協力とは異なる、「金を出しても口は出さない」、「タイの自主性に一切を任せる」技術移転・人材育成機関の設立に向け、各方面に働きかけました。

穂積の決意を受け止めたクラハーン（東京大学・工学部）、キャティボン（大阪大学・医学部）、スポン（東京大学・工学部）、タヌース（東京大学・医学部）、パタマワディー（東京大学・経済学部）各氏の若き元日本留学生5名がこの新しい経済協力の実現に向けタイ国法人の設立委員となり奔走し、彼らの推薦により設立責任者にはソンマーイ・フントラクーン氏（慶応大学卒・当時はタイ産業金融公社総裁、後に大蔵大臣）が擁立されます。5人はそれぞれの仕事を終えた後、手弁当で毎夜会議を重ね、新構想実現への道を作り上げて行きました。

1972年7月には日本政府や企業の日本側の窓口となる（社）日・タイ経済協力協会が設立され、事務所はABK内に置かれました。そして、穂積の揺るがぬ意志と説得でタイ側の望むかたちを実現し、1973年1月に技術移転・人材育成機関としての泰日経済技術振興協会（Technology Promotion Association (Thai-Japan)）がタイ政府より認可されます。「金を出しても口は出さない。」「事業はタイ人たちに委ねる。」「組織の理事は全てタイ人」という、日本の補助金事業としては極めて異例づくしの形で動き出しました。

オフィスビル（ウーチューリアンビル；ラマ4世通り）のワンフロアーに事務所



【パッタナカーン新館】534/4 Pattanakarn Road
Soi 18, Bangkok 10250

Tel: +66-2-717-3000 Fax: +66-2-719-9479

を置いてスタートしたTPAは、当初技術経営セミナー、語学講座（日本語、タイ語）、技術資料の翻訳出版といった事業を行い、その後は工業計測技術訓練、工業計測機器校正などタイの工業化をリードし、支えながら順調に事業を拡大し、1993年からは海外で初の大学対抗ロボットコンテスト（NHK主催のロボコンと連携）のタイ大会を主催するなど、その存在は企業関係者のみならず一般庶民にも、ソーソーター（タイ語略称）の名で広く知れ渡るようになりました。

またTPAは、設立から2年後の1975年にはバンコク・スクムウィット・ソイ29に会館が完成、事務所を移転し、その後の事業拡大に伴い1985年に別館を増築、さらに1997年には2つめの建物となるTPA付属技術振興センター（TPI）をバンコク・パッタナカーンに建設し、タイ国の工業化を担う産業人材の育成、経営者の育成、企業の育成等、活動の幅を広げてきました。



TNIを訪れた安倍首相。右隣がスポン TNI 理事長
後方に穂積・ソムマーイ両氏の銅像を望む

こうして次々と関係者の夢を実現させてきた TPA は、2003 年の創立 30 周年を契機に TPA で培った人材育成ノウハウ、人的資源とネットワークをもとに、TPA 設立当初からの夢だった「学校教育・技術学校をつくる」の具体化に動き出します。そして、これまでタイにない特色のある大学、日本のものづくりを実践教育の核にとりい

れた工業大学として、2007 年に日泰工業大学（TNI；Thai Nihon Institute of Thechnology）を開学します。TNI は関係者の熱意と努力で日本の大学との連携、企業との連携等とその特色を生かし、後発で、開校間もない大学ながら、先の安倍首相が訪タイの際、多忙な合間を縫ってこの TNI を訪問したように、TNI は、今やタイのみならず、日本産業界、教育界からの熱い注目を受けています。

TPA は現在、セミナー研修、付属語学学校、出版、校正サービス・環境分析、企業診断・コンサルティング、そして、ロボットコンテストのタイ大会開催、日本への実地研修団の派遣など、多種多様な総合的人材育成、技術移転サービスを行い、タイ産業界の発展、人材の育成に努めています。

TPA の事業

★セミナー研修・企業診断・コンサルティング事業

- ・一般セミナー研修・企業内研修・通信教育（産業能率大学）
- ・研修団の派遣（国内外）・産業情報センター
- ・企業診断・コンサルティング

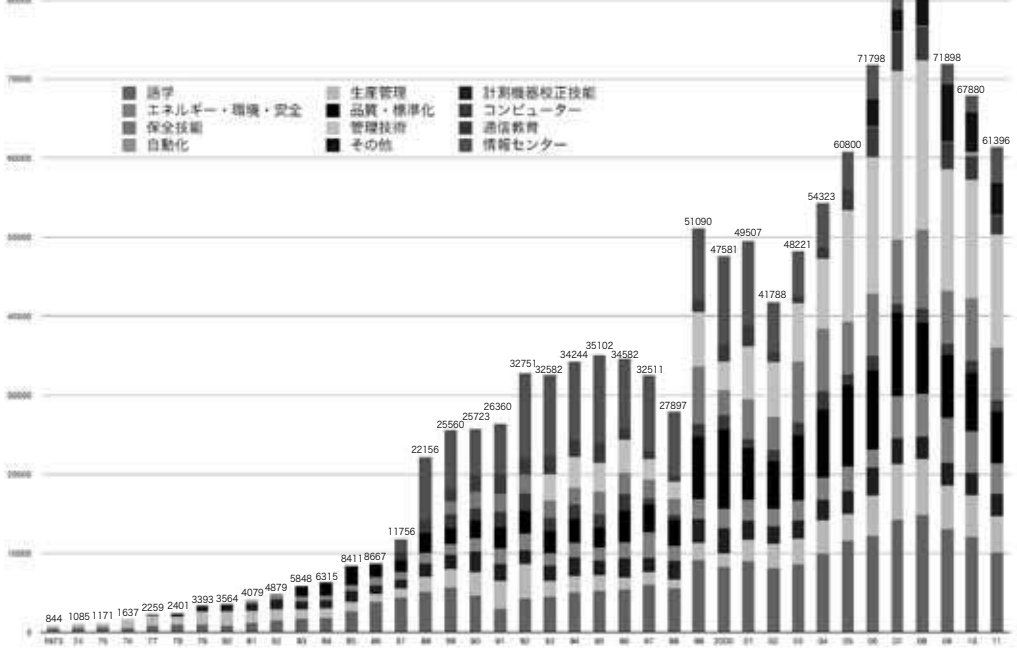
★付属語学学校

- ・語学コース（日本語／タイ語／英語／中国語／韓国語）
- ・語学・文化推進活動（日本留学紹介／スピーチコンテスト／スタディーツアー／カルチャーフェスティバル）
- ・フランチャイズ
- ・出版・販売事業

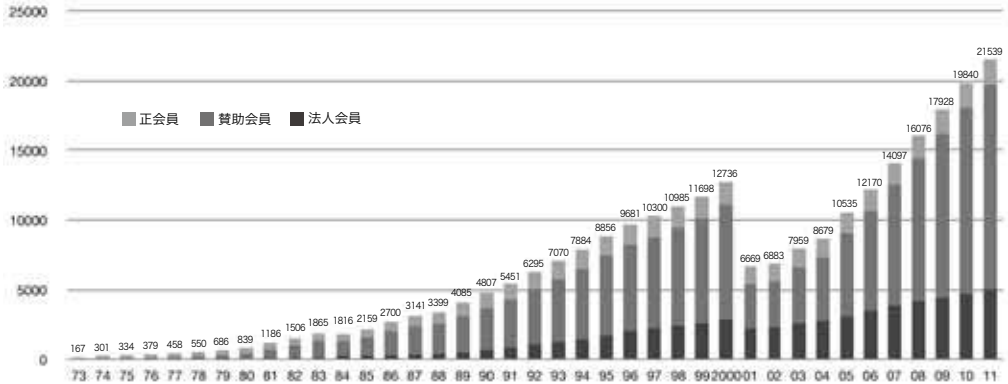
★工業計測機器・実験器具校正センター

- ・工業計測機器校正サービス（電気／温度／照度／質量・重量／圧力・真空／強度・回転／サイズ・長さ／医療機器）
- ・実験器具校正サービス（体積／化学分析機器／湿度）
- ・出張校正サービス・二次標準器

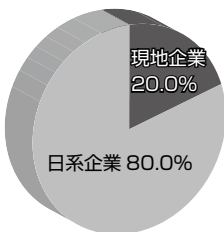
TPA 利用者数推移



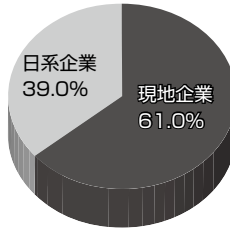
TPA 会員企業数推移



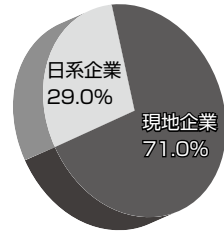
語学研修利用率



セミナー研修利用率



校正サービス利用率



ミャンマーのミンウェイさん 47年振りの ABK 来館！

1960年6月、アジア文化会館（ABK）が竣工してまもなくの頃の ABK には、ビルマからの留学生としてアウンチョウさん（東京大学・医学部）、ココレイさん（東京医科歯科大学・医学部）の2名が在館していた。そのお二人を訪ね、当時東京工業大学に通っていたミンウェイさんが ABK に時々、訪ねて来ていた。そして、アウンチョウさん、ココレイさんが留守の時に、食堂でよく小木曾さんにご馳走になっていた。今もそうしたことは鮮明に覚えており、今回の来日では、ぜひ、なつかしい小木曾さんに会って、お礼を言いたいと、訪ねてこられたものである。当時、ABK の食堂には A、B、C 三種類の定食があり、C 定食が 60 円で、小木曾さんがおごったのは大体 C 定食だったが、ミンウェイさんは、ポテトとビーフの入ったカレーをよく食べた、と当時の思い出を楽しそうに語った。

ミンウェイさんは 1959 年 日本政府国費留学生として来日、日本語を学んだ後、東京工業大学に入学、機械工学を専攻した。1965 年に卒業後、AOTS の研修生となり東芝（川崎）で研修を受けて後、1965 年に帰国した。東京工業大学での指導教官は後年学長（S.56-60）となられた松田武彦先生で、今でも大変印象に残っているのは、その当時すでにシミュレーションゲームを授業にとりいれており、40 名の生徒を 8 グループに分けそれぞれの



Mr. Myint Wai

ワ・ミン・グループ会長（Chairman, Wa Minn Group of Companies）、ミャンマー日本留学生会会長（President of Myanmar Association of Japan Alumni (MAJA)）

グループがテーマを決めて、多角的なシミュレーションを行わせていたことだった。ミンウェイさんのグループは下駄をつくった。ミャンマーから木材を輸入して、鼻緒は車のタイヤを使い、できるだけ安く作る。そんなことを 1960 年代に学部の子が行っており、とても勉強になったとのことである。

周知の通り、2012 年、アメリカを始め各国の経済制裁の一部緩和、停止が行われミャンマーは民主化の方向に舵を切った。早速日本からも企業の視察が相次ぎ、長年軍事政権下で鎖国状態が続いたミャンマーへの開発への熱いまなざしが各国から注がれている。

そこで、現在ミャンマー政府公認のオール

ジャパンの同窓会であるミャンマー元日本留
学生協会 (MAJA ; Myanmar Association of
Japan Alumni) の現会長をしているミンウエ
イさんに、MAJA について伺った。

ミャンマーでは MAJA の設立以前、長い
間公式の組織は認められていなかったので、
非公式の会として南方特別留学生 (1943 年
～ 1945 年の第二次世界大戦中、大日本帝国
政府が東南アジアから招いた国費留学生) が
中心の同窓会が MAJA の前身となっていま
す。そして、MAJA 設立の 2001 年に、それ
までに日本に留学しミャンマーに戻ってつ
くっていた色々なグループの非公式な同窓
会を一つにまとめ MAJA をつくり、2002 年、
元日本留学生の同窓会としてミャンマー政
府より公認されました。元留学生同窓生の
グループ、AOTS 同窓生のグループ、JICA
同窓生のグループ、交流基金同窓生のグル
ープ、それに各大学別同窓生のグループ等、
MAJA で統合しました。その初代会長はア
ウンチョウ先生です。2001 年 MAJA は 49
名でスタートしましたが、今は約 1,200 名に
なっています。その中に留学生出身者は約
800 名います。

現在の MAJA の活動は次の通りです。

1. 日本大使館と協力し日本語能力試験
(JLPT) の試験を実施
2. 日本留学試験 (EJU) の実施 (年 2 回)
3. 文部省奨学生 (研究生) の募集と選考
4. ア ス ジャ ・ イン タ ー ナ シ ョ ナ
ル <ASJA (AsiaJapan Alumni)

International> の奨学生を募集・選考・
派遣

5. N.I.Y.E (National Institute for Youth
Education) Junior Program の募集・選考・
派遣
6. Asian Youth Development Programme
(Okinawa) 募集・選考・派遣
7. AFS Programme の募集と支援
8. 絆プロジェクト募集と選考 (2012)
9. 日本学生支援機構 (JSASSO) との協同
により、日本留学セミナーを開催
10. 日本大使館と共催で日本語スピーチコン
テスト開催
11. 日本大使館と共催で日本文化ショー開
催
12. 私費留学生の為の日本留学相談と支援
13. 各種セミナーの開催
14. 日本語クラス開催 (無料)
15. 翻訳コンペティション開催
16. 定例理事会開催 (月 1 回) と総会開催 (年
1 回)
17. ASCOJA 会議に出席
18. その他

なお、JLPT の試験は現在 2500 ～ 3200 名
位が受験します。1 級だけでも約 200 名が受
験し、ミャンマーで 1 級をとる人もいます。
JLPT では約 60% 位が合格します。文法が日
本語と似ていることもあり、マスターする人
は早いかもしれません。1 級試験の担当は毎
年私がしています。日本へ留学する学生には
日本語の他専門について、学校について、ま
た書類の作り方も指導しています。

MAJA 会長になってからは、日本に留学



小木曾理事長をはじめ、再会した旧知の仲間と

する学生の為に歓送会を開きますが、必ずオリエンテーションを行います。その時の挨拶では、昔、自分が文部省留学生として日本へ留学した時の話をします。私は64名の中から4名に選ばれて、日本に留学しました。自分の留学中の苦労や色々な経験について話します。

アウンチョウ先生がMAJAの会長をして

いた2009年11月には、ASEAN元日本留学生評議会（ASCOJA；ASEAN Council of Japan Alumni）の総会を初めてミャンマーで、MAJAが主催し開催しましたが、とても感動的な出来事でした。

今まで、ミャンマーは長い間鎖国状態で閉ざされていましたが、昨年経済制裁も解かれ門戸が開かれました。これからは国づく

りを担う若い人を育てなければなりません。MAJAはそのために留学生を日本へ送り出すと同時に、近い将来大学をつくることも計画しています。そこで、今回ミャンマーに戻る時、ABK同窓生でタイの友人のSupong Chayutsahakijさんが理事長を務めているタイの泰日工業大学を見学してからミャンマーに戻る予定です。（文責 編集部）

MAJA Secretariat (MAJA 事務局)

Room (707), Building (C), Pearl Condominium, Kaba Aye Pagoda Road, Bahan Township, Yangon, Myanmar.

Tel 95-9-8612151, 95-9-8613848

E-mail maja-ygn@goldenland.com.mm, maja.ygn@gmail.com

URL <http://maja-asocoja.webs.com>



第10回総会の様子
(MAJA ホームページより)

<ミャンマー概要>

国名●ミャンマー連邦 Union of Myanmar

面積●67万6,578平方キロメートル（日本の1.8倍）

人口●6,062万人<2011年、出所：アジア開発銀行（ADB）>

首都●ネーピードー

民族●ビルマ族（約70%）、カレン族、カチン族、カヤー族、ラカイン族、チン族、モン族、ヤカイン族、
シャン族

言語●ミャンマー語、シャン語、カレン語、英語

宗教●仏教（89.4%）、キリスト教（4.9%）、イスラム教（3.9%）、ヒンドゥー教（0.5%）

一人あたりのGDP（名目；2011年）：824ドル

通貨●チャット（Kyat）（1ドル＝818チャット；中央銀行レート；2012年4月平均）

政体●大統領制、共和制

元首●テイン・セイン大統領（Mr. Thein Sein）（2011年3月30日就任・任期5年）

在ミャンマー邦人数●543人（2011年10月現在）

在日ミャンマー人数●8,577人（2010年12月末現在、外国人登録者数）



ミャンマーの主要品目別輸出入順位 <2010年-2011年〔出所〕ミャンマー中央統計局通関>

輸出 ①天然ガス ②豆類 ③縫製品 ④魚類 ⑤チーク ⑥堅木 ⑦コメ ⑧ゴム ⑨エビ ⑩ごま
⑪その他

輸入 ①石油製品 ②一般・輸送機械 ③卑金属・同製品 ④電気機械 ⑤器具 ⑥食用植物油、
⑦プラスチック ⑧合繊維物 ⑨医薬品 ⑩セメント ⑪紙・同製品 ⑫ゴム製品 ⑬その他

ミャンマーの主要国・地域別輸出入順位 <2010年-2011年〔出所〕ミャンマー中央統計局通関>

輸出 ①タイ ②中国 ③インド ④シンガポール ⑤日本 ⑥韓国 ⑦マレーシア ⑧ドイツ ⑨香港
⑩インドネシア

輸入 ①中国 ②シンガポール ③タイ ④日本 ⑤韓国 ⑥インドネシア ⑦インド ⑧マレーシア
⑨米国 ⑩ドイツ ⑪フランス

ミャンマーの国別対内直接投資順位

<2010年-2011年>

①イギリス ②インド ③マレーシア
④パナマ ⑤韓国 ⑥ベトナム ⑦日本
⑧香港 ⑨タイ ⑩シンガポール



開発が進むヤンゴン市内

「アジア・アフリカの独立と発展に尽した人々」より

オン・サン /Aung San (1915-1947 ビルマ：現ミャンマー)

アジア文化会館（ABK）は1960年に竣工してから運営母体の財団法人アジア学生文化協会創設者で理事長の穂積五一の指導のもと、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの留学生・研修生が、民族・思想・宗教等の違いを超え、自由と平等の原則のもと共同生活を営み、勉学に励みながら互いに切磋琢磨し、各自の向上に努力を払い、それぞれ母国の複雑で、起伏のある現実を乗り越え、協力し前進することを目指し、学生文化会（ABKの自治会；留学生、研修生、日本人により組織）を運営。穂積の発案で、学生文化会でABK在館生の出身国の独立と発展のためにつくした先人たちのことを紹介しようと冊子の発刊が計画され、平坦ではなかった作業を経て1963年に発刊に至る。民族の自由の為、人類の平和の為に各国の独立と発展に尽くされた先人の写真と略伝はそれぞれの国のものが担当した。本の名称は、「アジア・アフリカの独立と発展に尽くした人々 Great Men of Asia and Africa」。また、これが契機となり、1964年ABKにおいてアジア・アフリカ・ラテンアメリカの独立と発展に尽くした先人たちの「慰霊祭」が行われ、これを経て、「アジア文化会館同窓会」が自発的に結成、設立された。ここでは、この冊子の中でも力作とされた当時東京医科歯科大学医学部に在籍していたビルマのココレイさん〔来日：'58/04/09、ABK在館：60/08/12-72/03/16（没年）〕が執筆したオン・サン（Aung San；現在標記はアウン・サン；1915-1947；アウン・サンスー・チーは娘）を「アジアの友」で今号より3回に亘ってご紹介したい。（原文は英文。日本語訳は小木曾友）

日本へ

今から23年前、つまり1940年11月初めのある日、2人のビルマ青年が東京の羽田空港に着いた。肌寒い季節なのに、2人はどう見ても不似合いな夏服に身を包んでいた。この2人のビルマ青年こそタキン・オン・サンとタキン・ラ・ミヤインの2人であり、ビルマ独立運動の為に日本へ援助を求めにやって来たところであった。2人は英国情報部の警戒の目を逃れて、こっそりビルマから抜け出して来たので、日本語は一言も分からず、もちろんパスポートなどは持っていなかった。

2人は空港で日本ビルマ協会事務局長「南」と名乗る一人の日本人に会い、すぐに東京を離れ、「南」の家のある浜松に連れて行かれた。実はこの「南」こそ日本参謀本部付鈴木敬司大佐

その人であった。この奇妙な出会いの6か月ほど前、参謀本部は鈴木大佐にビルマに行くよう指令した。そして彼は読売新聞の特派員南と偽ってビルマに行ったのであった。ラングーンにいる間にビルマの指導者達と秘密裏に折衝を重ね、その結果として、この2人のビルマ青年が日本へ派遣されたのである。

その当時のビルマは英国の支配に反抗するのではないかという恐れから、ビルマの青年達は軍隊の訓練を受けることが出来ず、ビルマ人の軍隊はなかった。独立運動を行うためには、ビルマ国外から武器弾薬その他の軍需品の援助を受ける必要があったのである。

南氏から「必要な武器を補給してビルマの独立運動を助けましょう」という保証を得た後、タキン・オン・サンはタキン・ラミヤン及び南と共にビルマ独立の青写真を描いた。1941年1月一

つの計画が東京に於てまとまり、それは「ビルマ独立草案」と名付けられた。1941年2月1日、この草案は日本陸軍幕僚の出席の下に、大本営で開かれた正式の会合に提出された。

この草案に従って、何人かのビルマ青年をビルマからこっそり日本へ派遣して、日本で軍事教育を受けさせるということに意見が一致した。

日本陸軍が、この新たに加わった愛国者達と一緒に、タイからビルマのテナセリム地方に進駐した時、ビルマ独立が宣言せられるであろう。そして兵力4,000に及ぶ新ビルマ陸軍が編成せられ、日本参謀本部から補給された武器で武装するであろう。それまでには、彼等はラングーンに到着し、そこで臨時政府が樹立され、つづいて代表議会が開かれることになる。

このような計画を実行するために、南氏（鈴木大佐）を長とする「南機関」と呼ばれる組織が正式に作られ、参謀本部から資金が与えられた。南氏はバンコックで「南方企業調査会」という名の商事会社として、その「南機関本部」を開設する事になった。

タキン・オン・サンは、ビルマ青年を密出国させるよう指令を受け、その使命を果たすためにビルマへ帰らねばならなかった。しかし彼はビルマで英国官憲に狙われ、5チャット懸賞付きの逮捕状が出されていた。ビルマ迄は大東亜海軍が船の便をはかった。タキン・オン・サンは義歯を付けて顔を変え、後に「南機関」に加わった杉井満という日本人と共に、日本船春丸にその船員と偽って乗り込み、ビルマに帰った。

1941年の3月から7月の間に、タキン・オン・サンは30人のビルマ青年を選んで密出国させることに成功した。この青年たちは現在「三十勇士」としてよく知られている。その中には一人の若い愛国者——今の革命評議会議長ネ・ウィ

ン大将も含まれていた。この「三十勇士」に対する日本陸軍の軍事訓練は、最初海南島の、次に台湾のそれぞれ日本海軍によって選ばれたある場所で行われた。彼等の中には、軍隊生活の経験者は一人もいなかったが、この軍事訓練は非常に激しいものであった。この若い「三十勇士」は生活が辛いことなど考える暇はなかった。彼等の心はただ一つの思い——ビルマの独立——でいっぱいだったからである。

やがて、この30人の青年たちはタイのバンコックに連れて行かれ、そこでビルマに向かって進撃する準備を整えた。一方、バンコックではビルマ人の募集が始められ、1941年12月末迄にはタイ国籍のビルマ人が150人以上入隊した。12月26日、ボ・オン・サン（「ボ」はビルマ語で「陸軍将校」を意味する）とその仲間たちは、応募した隊員及び南機関の日本人たちと共に、ビルマ古来の風習に従って、腕から血をとり、それを飲む特別な儀式を行って、忠誠と兄弟の固い約束を交わした。そしてビルマ独立運動の為にいつでも生命を捧げることを誓った。ビルマ陸軍は正式に「ビルマ独立軍」(Burma Independence Army-B.I.A.)と名付けられた。

このように、ボジョ・オン・サンはビルマ独立の父であるばかりでなく、ビルマ陸軍の創設者であり父でもあった。「ボジョ」という言葉は、ビルマ語で「將軍」を意味するが、ビルマ国民は愛情をこめてただ「ボジョ」と呼んだ。

私たちがビルマの近代史を語る時、そしてまたビルマがいかにして独立を取り戻したかについて語る時、ボジョ・オン・サンの物語を忘れるわけにはいかない。というのは、オン・サンの学生時代からの人生はそのままビルマ独立運

動の歴史に他ならないからである。全生涯を通じ、彼はまず初めに学生指導者として、次に陸軍司令官として、最後に国民の指導者としてビルマ独立の為にその一生を捧げたのである。

ボジョ・オン・サンは1915年2月13日の土曜日に、マグエ地方のナッマウという町で生まれた。ビルマでは、土曜日に生まれる男の子は、非常に聡明で優れた才能の持ち主であると信じられている。ちなみにビルマのウ・ヌー前首相もまた土曜日の生まれである。オン・サンはウー・パーとドウ・スーの間に生まれた9人の子供の末っ子であった。

祖先は昔有名であった。彼の大叔父、つまり祖母の兄弟の一人は英国の植民地時代の初期に「ビルマの英雄」という名声を得ていた。1885年英国がビルマを併合した時、多くの頑固なビルマ人の指導者たちは、英国の支配下に生きる事を拒否し、英国軍隊と戦った。その中の一人がボジョ・オン・サンの大叔父ボ・ラ・ヨンであった。3年間英国兵と闘ったが、武器弾薬と食糧が不足してついに捕らえられた。国民に対する指導力と影響力を買われて、ボ・ラ・ヨンはドン・ドゥイン・ジー市長の地位を英国から与えられたが、ボ・ラ・ヨンは「白色インディアン」と呼ばれていた。ボ・ラ・ヨンは英国人によって首をはねられ、その首は国民へのみせしめとして木に吊された。このようにして、オン・サンの大叔父は外国の支配下で生きるより戦って死ぬ方が良いという実例を示したのである。

学生時代

オン・サン青年は、はじめある仏教寺院に通っていたが、やがてナッマウの地方高校に入り、その後イエナジョン国立高校に通い、そして

1932年にラングーン大学へ入学した。大学では、英国文学、近代史、政治学を学んだ。彼は大変な読書家で、その部屋は、プラトー、カール・マルクスその他の政治哲学に関する書物でいっぱいであった。大学における最後の年、1936年に彼はラングーン大学学生連盟機関紙「オーウェイ誌」の編集者として働いた。コ・ヌー（後にタキン・ヌー、そして独立ビルマの初代首相となったウー・ヌー）は、その当時学生連盟会長であった。

1936年2月、「オーウェイ誌」が発行された時、「野放しの鬼」という記事が載った。それは大学当局の一人を皮肉たっぷりに攻撃したものであった。この記事が大学当局を侮辱したとして、学長DJスロス氏はその雑誌の責任者であるコ・オン・サンを召還した。スロス氏は必要な措置をとるために、その筆者の正体を明らかにするよう要求した。しかし、コ・オン・サンは編集者として、雑誌に載った記事については、自分自身が全責任を負わねばならないことをよく知っていたので、ジャーナリストのエチケットを守って、「ヤマミン（閻魔大王）」という偽名で書いたその筆者の正体を明らかにしなかった。

コ・オン・サンは、もし、筆者の正体を明らかにしないならば大学から追放するという警告をうけた。しかし彼は恐れなかった。オン・サンはこの最後通告を拒否し、筆者の名前を明さなかった。（実はこの記事は編集委員会の一学生、——今日「オーウェイ日報」紙の編集者ニオ・ミヤ——によって書かれたものである。）

コ・オン・サンは学長の勧告を拒否したために大学から追放された。学生連盟会長であったコ・ヌー（ウー・ヌー）は友人コ・オン・サンの立場を支持したので、同じく大学から追放さ

れた。この学生指導者の追放は、現在「1936年の学生ストライキ」として名高いストライキを惹き起こした。ラングーン大学学生連盟によるストライキは全国学生の強力な支持を受け、1936年2月22日に始まった。この学生ストライキは、またたく間に地方高校に拡がり、ビルマの全学生が団結して一つの強大な力となった。云うまでもなく、その背後にはコ・オン・サン、コ・ヌー、その他の学生指導者たちがいた。その二、三を挙げて見てもコ・チョウ・ニューイン（前首相代理）、コ・オーン（前駐英大使、後に駐ソ大使）、コ・ラシッド（前通産大臣）、コ・テイン・ペ（前国会議員、現在著名な作家、政治家）等である。

三ヶ月後にこのストライキは終わった。その間に全ビルマの学生が団結した。ストライキの後には、地方に学生連盟を組織することが必要となった。全ビルマ学生連盟、及び全ラングーン学生連盟が結成され、オン・サンはその生みの親の一人であった。（彼は又、全ビルマ学生連盟会長の役もつとめた。）

そうした間にもオン・サンは政治、経済、歴史、軍事科学に関する多くの本を読んでいた。彼は又、「オーウェイ誌」、「新ビルマ新聞」、「読書の世界」等にいくつかの記事を載せた。「読書の世界」は月刊誌で、新しい作品の紹介につとめており、ビルマ文学史上重要な役割を果たしている。この雑誌にオン・サンは男女学生に制服を着ることを勧める記事を書いた。パンタナウの一学校教師から、ウ・タントという名で、制服を着ることについての、このオン・サンの見解に反対する記事が寄せられた。コ・オン・サンもウ・タントも共に非常に才能豊かな、すぐれた知性の持ち主だったので、この賛否相対立する記事は読者の間に多くの関心を引き起こ

した。この特別な問題についてオン・サンと見解を異にしたウ・タントは、今日、ニューヨークで国際連合事務総長として活躍している。

ストライキの一年後、大学を卒業したコ・オン・サンは法律学校に入った。しかし彼は専門の勉強よりも政治に専念した。彼は極めて聡明な学生であり、輝かしい未来を約束する恵まれた学歴を有っていた。しかしオン・サンは専門の勉強を棄てて、まっしぐらに政治にとびこんだ。彼は学生連盟の資金を集めるために、又学生を組織し、学生の団結を強めるために地方へ行った。マンダレイで開かれた最初の全ビルマ学生会議において、オン・サンは書記に選ばれ、友人のコ・ラシッドが会長に選ばれた。この会議には来賓としてインドのパンディット・ジャワハール・ネルが、チャーミングな令嬢インディラ・ネルを伴って出席していた。コ・オン・サンは又、1938年～39年には、ラングーン大学学生連盟の副会長、後に会長として活躍した。1938年以来、彼の政治的活動は縦横無尽であった。彼は既にドバマ・アシ・アヨン（ビルマ民族主義者同盟）に加盟していた。この同盟は、後にその世界平和のための活動に対し、スターリン平和賞を授与されたタキン・コダウ・マインによって率いられていた。

この時には、コ・オン・サンはタキン・オン・サンになっていた。「タキン」はビルマ語で主人を意味している。この言葉は、戦争前には、ビルマに於ては、ビルマ人だけが主人であって、ビルマを支配する外国人が主人なのではない、ということを英国人に思い知らせる為に広く使われていた。まもなく、タキン・オン・サンはドバマ・アシ・アヨンの書記長になった。この政党は、大学を去った若い学生や、後に自ら進んで「三十勇士」の一員となった他の若いタキ

ンたちの集合場所であった。

この頃までには、農民・労働者・学生間の団結は大いに強められ、その組織においては学生とタキンたちが重要な役割を果たしていた。イエナンジョンのストライキを企て、イエナンジョンからラングーンに向けて、約270マイルの距離を示威行進した時、ラングーン大学学生連盟の2人の学生指導者、故コ・バ・ヘインとコ・バ・スウェ（元首相、後に首相代理）が労働者の先頭に立った。しかしこの2人は目的地に着く前に、マグエで英国官憲に逮捕されてしまった。この学生指導者たちの逮捕の結果、すぐに一大ストライキが起こった。今度は、ビルマ国民は政治的に成熟していた。農民、労働者、学生、そして仏教の僧侶までが団結してストライキと示威行進に加わった。強力な政党、ドバマ・アシアヨンの書記長タキン・オン・サンは、バ・モー博士の政府を打倒することになった、この大衆政治運動を導くのに重要な役割を果たした。ラングーンにおける学生の示威運動の間に、一人の学生指導者ボ・オン・チョウは英国官憲に射殺された。

このようにして、彼は、ビルマ独立の祭壇に捧げられた最初の学生犠牲者となったのである。タキン・オン・サンの活動が激しくなるにつれて、英国政府は彼の政治活動に無関心ではいられなくなった。そして1939年、英国政府の告訴状によれば、「武力による政府転覆の陰謀」の罪で逮捕された。しかし、後に釈放された。1940年3月、オン・サンはタキン代表団の首席となって、インド国民会議派のラムガールにおける大会に出席した。そこで彼はマハトマ・ガンディ、パンディット・ネール、ボース或いはナラヤンなど、インドの多くの指導者たちに

会って討論を重ねた。

西に於ては英国とドイツが交戦状態にあった。そしてビルマでは、タキンたちによる独立運動が極めて活発になっていた。そして多くのタキン指導者たちが英国官憲に逮捕され、投獄された。タキン・オン・サンは、もし捕えられて何年も投獄されることは、国にとっても、彼自身にとっても時間の浪費であると信じていた。そして1940年6月、姿を消し地下に潜った。地下に入るということについてオン・サンと見解を異にしたタキン・ヌーはただちに捕まり、約2年間投獄された。

タキン・オン・サンの最初の考えは、タキン・ラ・ミヤインとビルマからこっそり抜け出して、中国に渡ることであった。8月24日、2人はアモイに着き、中国本土に渡る機会を待っていた。ところが一方、ラングーンに於ては、日本人南と、戦時中、初代駐日ビルマ大使になったティン・モン博士の間に秘密裏の折衝が行われていた。そして2人のタキン指導者をアモイから東京に派遣する手筈がラングーンに於て整えられた。アモイの日本憲兵神田少佐の尽力によって、2人のタキンは南氏が待ち受ける東京へ派遣されたのである。

南氏は後にボ・モジョー（雷将校）というビルマ名でビルマ人によく知られるようになった。同じように「三十勇士」も又それぞれ日本名を持っている。たとえばボ・オン・サンは面田紋次、ボ・ネ・ウィンが高杉晋と呼ばれた。ビルマ独立軍がバンコックに生まれた後、二個師団の日本軍と共に、三列縦隊になってビルマへ進駐した。ビルマ独立軍へ与えられた武器は中国戦線で捕獲した古いものであった。しかし独立軍のメンバーは既に武器よりもっと大切なものによって武装していた。それはビルマの自

由の為に戦う不屈の精神であった。独立軍がビルマに向かって進軍して行くうちに、参加した志願兵の数は急速に増えていった。独立軍がビルマ領土に入るや否やその人数は、将校、応募兵併せて3,776人という驚くべき数にふくらんだ。ラングーンに着いた時には、一万の兵力に増大していた。独立軍と並んで進軍していた日本人でさえ、それを目の当たりに見て驚いた。日本の一将校川島大佐は日記に書いている。「多くの青年たちが祖国独立の為に戦いに志願した。このことから、ビルマ国民はいかに独立を待望しているかがわかる。この成功を記念する為に、テナセリンのタヴォイでお祭が行われた。そしてビルマ独立軍のスローガンが生まれた。この事はビルマ人が自由の為に心底から献身的に尽くしていたことを示している。この愛国的な気風は普く広まっていた。ビルマ独立軍の志願兵は、日に日に増えていった。」

町は次々に進軍するビルマ独立軍と日本軍の手に落ちて行った。ラングーンがまず陥落し、次いでトンゲー、メイクティラ、マンダレー、シュウェボー、ミツチナを瞬く間に手に入れた。1942年5月迄には、事実上全ビルマが占領されたが、日本軍が約束したビルマ独立宣言はまだ行われなかった。英国軍が去った時、ビルマにいたバ・モー博士やタキン・ヌーのような多くの指導者たちは釈放された。ボ・オン・サンの指揮するビルマ独立軍は、ビルマの全戦線で勇敢に戦った。しかし、「三十勇士」のうちの4人は戦闘中に死んだ。独立軍はいたる所でビルマ国民に大きな喜びを持って暖かく迎え入れられた。多くの若い志願兵が参加し1942年5月の終わりまでには、退却した英国軍から奪った武器で武装した2万3千の兵力に膨らんだ。ビルマの戦いが終わると、学生時代から事実上休

む時の無かったボ・オン・サンはマラリヤで倒れ、ビルマ独立軍病院に入院した。そこで彼は、マ・キン・キーという上級看護婦に会い、初めてオン・サンの心にロマンスの花が開いた。やがてオン・サンは求婚し、めでたく結婚した。

その間、日本はビルマの独立宣言を行うという約束を果していなかった。鈴木大佐(南氏)は、日本陸軍ビルマ総司令官、飯田大将の下へ行き、ビルマ独立宣言を行うよう、懇請した。鈴木大佐は東京からの指令を待つように告げられた。東京の参謀本部の武藤大将がビルマを訪れた時に、ビルマの独立宣言は時期尚早であると鈴木大佐に伝えた。ビルマは植民地主義の軛から解放されたが、只それはファシズムの鉄の踵に踏みにじられたに過ぎなかったように思われた。日本兵の振舞は粗暴であった。日本兵は欲しいものが手に入らないとビルマ人の顔を打った。ビルマ国民は、次第にビルマに於ける日本当局に対する信頼を失いはじめた。日本兵とビルマ兵の間に個人的な衝突がしばしば起こった。ボ・オン・サンと将校たちは、ビルマ兵をなだめねばならず、忍耐してストライキの時がくるのを待つよう指令した。その間、ビルマ兵たちは、日本人教師から出来る限り軍事訓練を学ぶよう勧告された。最も優れた士官候補生たちが選抜されて日本の陸軍士官学校へ送られた。この頃、ビルマ独立軍は、ボ・オン・サンを総司令官とするビルマ防衛軍という新しい名前に変わっていた。1943年3月、ボ・オン・サンは陸軍少将に昇進した。その時から彼はボジョ・オン・サンとなった。同じ年にバ・モー博士及び他の指導者たちと共に、オン・サン將軍は東京に招かれ、天皇の謁見を受けた。天皇は彼に勲二等旭日重光章を授けた。

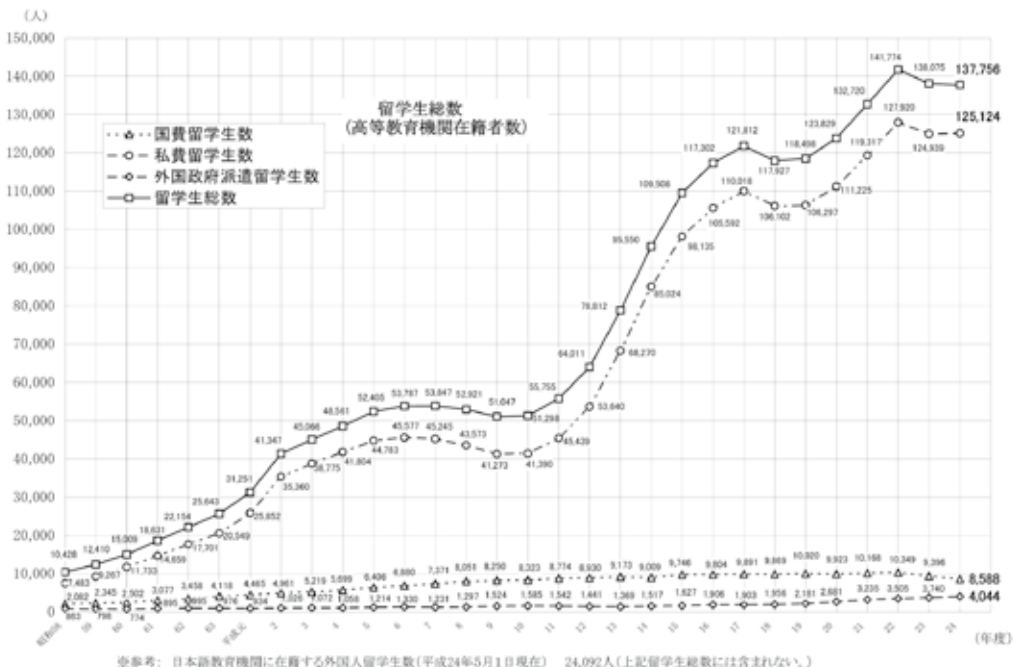
(つづく)

平成24年度 外国人留学生在籍状況調査結果

独立行政法人 日本学生支援機構 統計資料より

平成24年（2012年）度の外国人留学生在籍状況調査結果が公表された。留学生数は東日本大震災の影響もあって数を減らした23年を若干下回る137,756人（前年比－319人）となった。

▶ 留学生数の推移

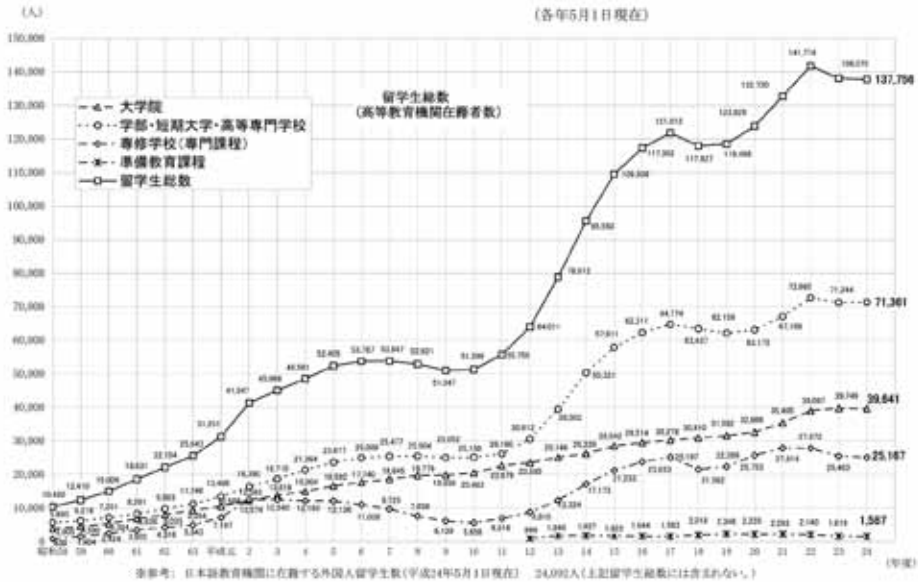


▶ 在籍段階別・国公私立別留学生数

		国立		公立		私立		計	
		留学生数	構成比	留学生数	構成比	留学生数	構成比	留学生数	構成比
在 学 段 階	大学院	24,680人 (24,937)	62.3% (62.7)	1,680人 (1,713)	4.2% (4.3)	13,281人 (13,099)	33.5% (33.0)	39,641人 (39,749)	100.0% (100.0)
	大学 (学部)	10,293人 (9,931)	14.9% (14.4)	1,636人 (1,495)	2.4% (2.2)	57,345人 (57,475)	82.8% (83.4)	69,274人 (68,901)	100.0% (100.0)
	短期大学	0人 (0)	0.0% (0.0)	6人 (7)	0.4% (0.4)	1,597人 (1,820)	99.6% (99.6)	1,603人 (1,827)	100.0% (100.0)
	高等専門 学校	432人 (470)	89.3% (91.1)	1人 (2)	0.2% (0.4)	51人 (44)	10.5% (8.5)	484人 (516)	100.0% (100.0)
	専修学校 (専門課程)	0人 (0)	0.0% (0.0)	12人 (13)	0.05% (0.05)	25,155人 (25,450)	99.95% (99.95)	25,167人 (25,463)	100.0% (100.0)
	準備教育 課程	0人 (0)	0.0% (0.0)	0人 (0)	0.0% (0.0)	1,587人 (1,619)	100.0% (100.0)	1,587人 (1,619)	100.0% (100.0)
	計	35,405人 (35,338)	25.7% (25.6)	3,335人 (3,230)	2.4% (2.3)	99,016人 (99,507)	71.9% (72.1)	137,756人 (138,075)	100.0% (100.0)

()内は平成23年5月1日現在の数

▶ 大学院・大学・短期大学・高等専門学校・専修学校（専門学校）・
準備教育課程における留学生数の推移



▶ 出身国（地域）別留学生数

国(地域)名	留学生数	構成比	国(地域)名	留学生数	構成比
中国	86,324人 (87,533)	62.7% (63.4)	フィリピン	497人 (694)	0.3% (0.4)
韓国	16,651人 (17,446)	12.1% (12.8)	英国	429人 (364)	0.3% (0.3)
台湾	4,617人 (4,321)	3.4% (3.3)	サウジアラビア	413人 (306)	0.3% (0.2)
ベトナム	4,373人 (4,033)	3.2% (3.0)	オーストラリア	338人 (231)	0.2% (0.2)
ネパール	2,451人 (2,446)	1.8% (1.5)	ロシア	333人 (331)	0.2% (0.2)
マレーシア	2,319人 (2,437)	1.7% (1.8)	カンボジア	311人 (326)	0.2% (0.2)
インドネシア	2,276人 (2,182)	1.7% (1.6)	カナダ	302人 (286)	0.2% (0.2)
タイ	2,167人 (2,386)	1.6% (1.7)	ブラジル	272人 (272)	0.2% (0.2)
アメリカ合衆国	2,133人 (1,456)	1.6% (1.1)	スウェーデン	244人 (193)	0.2% (0.1)
ミャンマー	1,151人 (1,130)	0.8% (0.8)	ラオス	223人 (240)	0.2% (0.2)
モンゴル	1,114人 (1,170)	0.8% (0.8)	イラン	213人 (229)	0.2% (0.2)
パキスタン	1,052人 (1,322)	0.8% (1.0)	エジプト	213人 (233)	0.2% (0.2)
フランス	740人 (330)	0.5% (0.4)	シンガポール	211人 (386)	0.2% (0.1)
スリランカ	670人 (232)	0.5% (0.2)	ウズベキスタン	203人 (191)	0.1% (0.1)
ドイツ	566人 (393)	0.4% (0.3)	その他	4,409人 (4,062)	3.2% (3.0)
インド	541人 (372)	0.4% (0.4)	計	137,756人 (136,073)	100.0% (100.0)

()内は平成23年5月1日現在の数

国別では中国が圧倒的なのは変わらず、上位3か国はお馴染だが、3位台湾にベトナムが迫っている。6年前の平成18年度の数字と比較してみると、4位のベトナムはおよそ2倍に、5位ネパールは2.5倍に増加している。一方で古くから日本企業の進出が盛んで最近改めてその重要性が目まぐるしく注目を集めているタイは留学生数では頭打ちの傾向にあるようだ。

▶ 出身地域別短期留学生数

国(地域)名	留学生数	構成比	国(地域)名	留学生数	構成比
中国	3,478人 (0.60)	31.2% (57.7)	イタリア	92人 (0.0)	0.8% (0.6)
韓国	1,595人 (0.28)	14.3% (23.2)	スペイン	72人 (0.0)	0.6% (0.5)
アメリカ合衆国	1,409人 (0.25)	12.8% (0.6)	モンゴル	55人 (0.0)	0.5% (0.7)
台湾	823人 (0.14)	7.4% (0.6)	ノルウェー	54人 (0.0)	0.5% (0.4)
フランス	454人 (0.08)	4.1% (0.6)	シンガポール	45人 (0.0)	0.4% (0.4)
ドイツ	415人 (0.07)	3.7% (0.6)	ポーランド	45人 (0.0)	0.4% (0.6)
タイ	301人 (0.05)	2.7% (0.3)	マレーシア	44人 (0.0)	0.4% (0.4)
英国	297人 (0.05)	2.7% (0.6)	フィリピン	43人 (0.0)	0.4% (0.5)
オーストラリア	223人 (0.04)	2.0% (0.4)	ニュージーランド	43人 (0.0)	0.4% (0.5)
インドネシア	196人 (0.03)	1.8% (0.6)	スイス	41人 (0.0)	0.4% (0.5)
ベトナム	158人 (0.03)	1.4% (0.6)	ベルギー	38人 (0.0)	0.3% (0.2)
カナダ	142人 (0.03)	1.3% (0.3)	ブラジル	37人 (0.0)	0.3% (0.5)
スウェーデン	122人 (0.02)	1.1% (0.6)	メキシコ	34人 (0.0)	0.3% (0.4)
ロシア	102人 (0.02)	0.9% (0.9)	デンマーク	34人 (0.0)	0.3% (0.5)
オランダ	99人 (0.02)	0.9% (0.7)	その他	563人 (0.9)	5.1% (0.4)
フィンランド	92人 (0.02)	0.8% (0.6)	計	11,146人 (19.2)	100.0% (100.0)

()内は平成23年5月1日現在の数

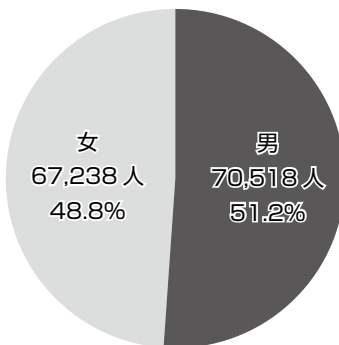
▶ 出身地域別留学生数

地域名	留学生数	構成比	左のうち短期留学生	
			留学生数	構成比
アジア	127,178人 (129,163)	92.3% (93.5)	6,876人 (6,192)	61.7% (67.9)
欧州	4,456人 (3,722)	3.2% (2.7)	2,240人 (1,597)	29.1% (37.5)
北米	2,435人 (1,742)	1.8% (1.3)	1,551人 (992)	13.9% (30.9)
中近東	1,112人 (1,018)	0.8% (0.7)	45人 (35)	0.4% (0.4)
アフリカ	1,106人 (1,136)	0.8% (0.8)	66人 (58)	0.6% (0.6)
中南米	926人 (886)	0.7% (0.6)	101人 (94)	0.9% (1.0)
オセアニア	543人 (408)	0.4% (0.3)	267人 (152)	2.4% (1.7)
計	137,756人 (138,675)	100.0% (100.0)	11,146人 (9,120)	100.0% (100.0)

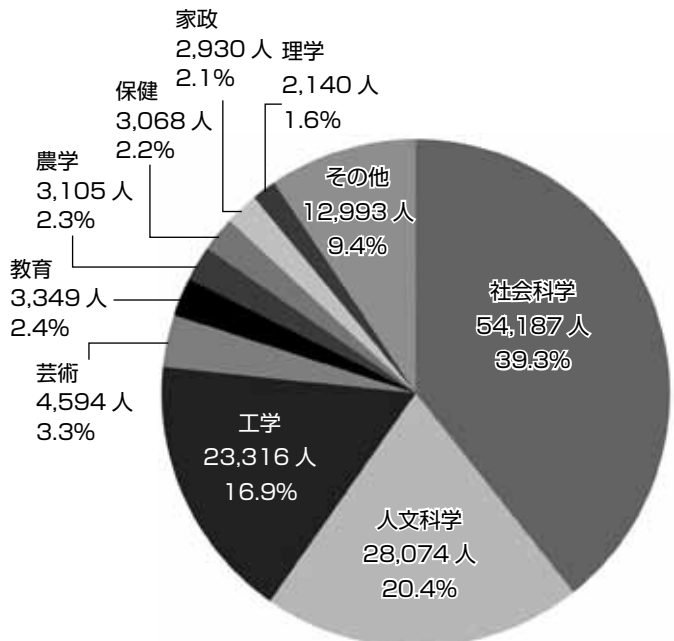
()内は平成23年5月1日現在の数

これまで同様、欧米は出身留学生に占める短期留学生の割合が高く、アジアは長期留学生が多い。

▶ 男女別留学生数



▶ 専攻分野別留学生数



▶ 地方別・都道府県別留学生数

地方名	留学生数	構成比	都道府県	留学生数	地方名	留学生数	構成比	都道府県	留学生数
北海道	2,737 (2,734)	2.0% (2.0)	北海道	2,737 (2,734)	岩手	35,691 (34,807)	18.6% (18.0)	三重	946 (1,025)
								山梨	454 (578)
								京都	6,900 (6,246)
								大阪	10,521 (10,375)
東北	3,385 (3,746)	2.5% (2.7)	青森	281 (413)	中国	6,921 (7,142)	5.0% (5.2)	兵庫	3,126 (4,939)
			岩手	350 (275)				奈良	1,463 (1,695)
			宮城	1,872 (2,018)				和歌山	379 (292)
			秋田	355 (292)				鳥取	183 (183)
関東	44,429 (44,080)	46.9% (46.4)	山形	225 (207)	四国	1,209 (1,418)	1.0% (1.0)	島根	195 (238)
			福島	302 (441)				岡山	2,273 (2,316)
			茨城	2,636 (2,713)				広島	2,499 (2,647)
			栃木	1,075 (1,073)				山口	1,671 (1,566)
中部	15,165 (15,441)	11.0% (11.2)	群馬	1,266 (1,571)	九州	18,219 (18,699)	13.2% (13.3)	徳島	332 (366)
			埼玉	3,877 (6,013)				香川	351 (578)
			千葉	5,290 (4,859)				愛媛	962 (929)
			東京	83,360 (43,180)				高知	164 (183)
近畿	44,429 (44,080)	46.9% (46.4)	神奈川	4,663 (4,663)	計	137,756 (138,075)	100.0% (100.0)	福岡	10,434 (10,635)
			新潟	1,523 (1,592)				佐賀	292 (341)
			富山	567 (571)				長崎	1,461 (1,518)
			石川	1,510 (1,670)				熊本	724 (667)
中国	15,165 (15,441)	11.0% (11.2)	福井	288 (309)	大分	3,562 (3,673)	宮崎	170 (167)	
			山梨	844 (889)				鹿児島	966 (981)
			長野	774 (801)				沖縄	606 (617)
			岐阜	1,496 (1,253)					
四国	15,165 (15,441)	11.0% (11.2)	静岡	1,583 (1,679)					
			愛知	6,623 (6,706)					

＜ 〉内は平成23年5月1日現在の数

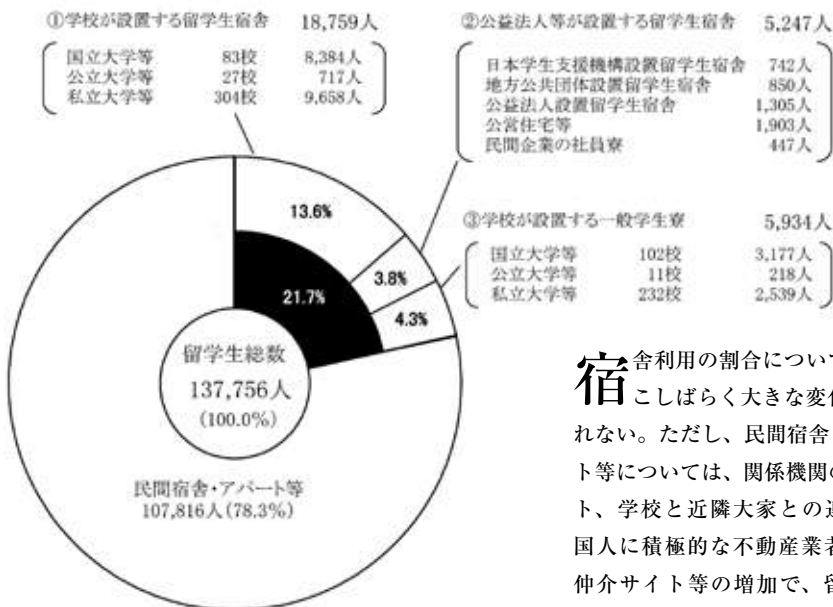
※大学の学部等が複数の都道府県に所在している場合、事務局本部が所在する都道府県にまとめて集計している。

▶留学生受入れ数の多い大学

学校名	留学生数
早稲田大学	私立 3,771人 (3,393人)
日本経済大学	私立 3,135人 (3,378人)
東京大学	国立 2,873人 (2,877人)
立命館アジア太平洋大学	私立 2,526人 (2,692人)
九州大学	国立 1,931人 (1,966人)
大阪大学	国立 1,925人 (1,780人)
筑波大学	国立 1,681人 (1,663人)
京都大学	国立 1,664人 (1,631人)
名古屋大学	国立 1,611人 (1,556人)
東北大学	国立 1,428人 (1,497人)
日本大学	私立 1,378人 (1,340人)
北海道大学	国立 1,317人 (1,340人)
立命館大学	私立 1,324人 (1,253人)
東京工業大学	国立 1,241人 (1,252人)
愛媛義塾大学	私立 1,203人 (1,072人)
神戸大学	国立 1,132人 (1,108人)
同志社大学	私立 1,131人 (877人)
大阪産業大学	私立 1,098人 (1,154人)
明治大学	私立 1,089人 (1,046人)
拓殖大学	私立 1,030人 (970人)
広島大学	国立 1,005人 (1,090人)
国士舘大学	私立 967人 (1,159人)
千葉大学	国立 961人 (1,025人)
明海大学	私立 924人 (859人)
横浜国立大学	国立 861人 (868人)
東京国際大学	私立 835人 (831人)
城西国際大学	私立 810人 (882人)
上智大学	私立 757人 (520人)
中央大学	私立 750人 (684人)
関西大学	私立 726人 (672人)

()内は平成23年5月1日現在の数

▶留学生宿舎の状況



宿舎利用の割合については、こ
こしばらく大きな変化は見ら
れない。ただし、民間宿舎・アパ
ート等については、関係機関のサポ
ート、学校と近隣大家との連携、外
国人に積極的な不動産業者および
仲介サイト等の増加で、留学生の
民間宿舎利用の利便性は年々増し
ていると言えるだろう。

日本語教育機関在籍の 留学生の状況

(平成24年5月1日現在の数字)

▶ 出身地域別留学生数

地域名	留学生数	構成比	前年比
アジア	22,921人	95.1%	▲ 1,673
欧州	774人	3.2%	59
北米	187人	0.8%	18
アフリカ	68人	0.3%	23
中近東	62人	0.3%	27
中南米	45人	0.2%	4
オセアニア	35人	0.1%	12
計	24,092人	100.0%	▲ 1,530

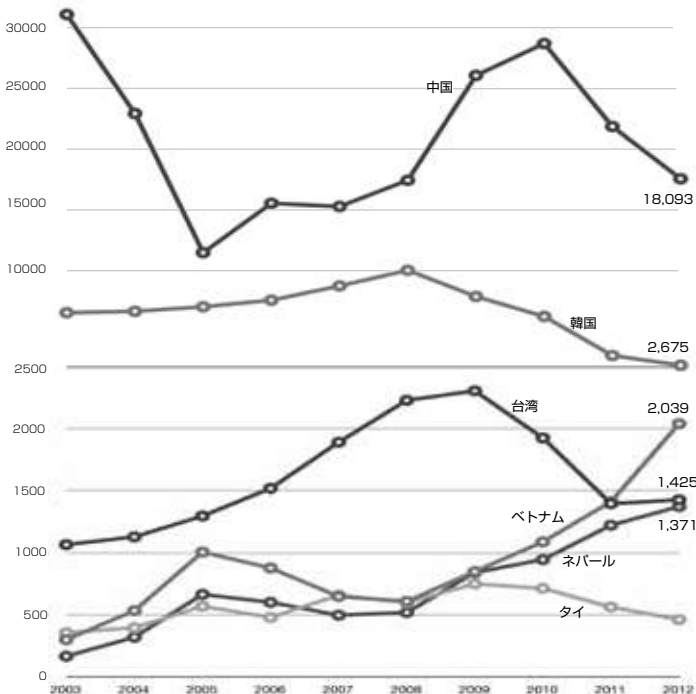
出身国（地域）別留学生数

国・地域	留学生数	構成比	前年比
中国	15,079人	62.6%	▲ 2,275
韓国	2,268人	9.4%	▲ 594
ベトナム	1,735人	7.2%	689
ネパール	1,150人	4.8%	193
台湾	962人	4.0%	61
ミャンマー	418人	1.7%	37
タイ	406人	1.7%	21
インドネシア	221人	0.9%	63
スウェーデン	207人	0.9%	37
スリランカ	175人	0.7%	42
その他	1,471人	6.1%	196
計	24,092人	100.0%	▲ 1,530

構成比こそ小さいが、唯一欧米でベスト10に入っているスウェーデンが目立つ。同国の人口は1000万人以下だが、欧州出身者の1/4以上を占めている。毎年少しずつ増加しており大学等の長・短期留学生と合わせると、450人以上が来日している。同国では近年若年層を中心に日本のサブカルチャーへの関心が著しく高まっているとのことだが、これが日本への関心・日本語学習者増に結びついているようだ。

6か国の日本語学校在籍者数の推移 ～（財）日本語教育振興協会公開資料より

* 値は各年度末。2012年のみ13年1月31日現在



グラフは、日本語教育振興協会の公開資料より作成した6か国の日本語教育機関在籍者数の変化。お馴染の上位3か国が減少し、ベトナム、ネパールが増加している。特にベトナムは経済発展及び日本企業の進出にあわせて急激に増加、減少の続く韓国に迫っている。また、ネパールも3位台湾にほぼ並んだ。このほかミャンマーもタイと並ぶ位置に来ている。

「ハノイ・ホーチミン訪問記」

立教ベトナムプロジェクト・スタディツアー

石渡 荘介 廣瀬 園子

立教大学ベトナムプロジェクトのメンバーが、新たな国際交流プロジェクト構築調査のため、ベトナムを訪れました。現地ではABK 小木曽友理事長の紹介で、ABK 同窓生を訪ね、様々なアドバイスと協力を得られたとのことで、今回そのレポートをお寄せいただいたのでここにご紹介します。

私たちは2012年3月に立教大学大学院ビジネスデザイン研究科を修了し、大学院教授、院生、修了生が主体となった立教ベトナムプロジェクトに参加しています。この立教ベトナムプロジェクトは、日越友好40周年を記念し日本とベトナムの人々を結ぶ新たな国際交流の可能性を探るプロジェクトです。プロジェクトには、「観光」「食文化」「医療・介護」の3つのグループがあり、私たちは、「医療・介護」グループに属し、ベトナムにおいて「慢性腎臓病の治療と技術支援ならびに看護教育支援プログラム」を実施することを目指しています。そして、昨年4月から勉強会を重ね、現地スタディツアーによる調査をするようになりました。

そこで、石渡が、長年留学生の日本語支援と交流のボランティア活動を行ってきた関係先のアジア文化会館（ABK）の小木曽理事長に相談してみるとよいとのアドバイスをいただき、早速、ベトナムの訪問先、通訳のご紹介等のご相談に二人でABKを訪問しました。

そして、ベトナムの訪問予定先のホーチミ

ン市ではベトナムで最大のドンズー日本語学校の創設者で校長のホエ先生、ハノイではベトナムで初めての私立大学創設者であるムイ先生のご紹介を受け、ベトナム・スタディツアーの具体化が動き出しました。

日本では生活習慣病の増加に伴い、人工透析導入患者数は現在30万人を超え、10年以上の長期透析患者数も年々増加傾向にあります。国内で人工透析を新たに始める人は毎年約3万人、そのうちの約45%を糖尿病患者が占めていると言われています。一方、定期的な健康診断を受ける制度や医療インフラの不足する発展途上国においては特に、生活習慣病の早期発見とともに、栄養管理や生活習慣の改善に留意する必要があります。ベトナムにおいてもドイモイ政策後、生活習慣病患者が増加していることから、プロジェクトの可能性について、現地を訪問し調査することになりました。

晩秋の成田を午前中に発ち、夕方に暖かなベトナムホーチミン市のホテルに到着、滞在



ドンズー日本語学校創設者・校長
ゲエン・ドクホエ先生



ドンズー日本語学校の授業。大変熱心に
授業を受けていました

先のマジェスティックホテルは機中で読んだ「サイゴンのいちばん長い日」に登場する歴史あるホテルです。

翌日には、スタディツアー参加者全員でJETROを表敬訪問し、午後はタクシーに分乗し、ホーチミン市中の下町を抜け住宅地にあるドンズー日本語学校を訪問しました。そこでホエ校長先生とアシスタントのゲエン・トゥアン・アンさん（東北大OB・電気通信専攻）にお会いし、お話を伺いました。

ホエ先生は、1974年帰国、1975年ベトナムの解放後は、ベトナムの国づくりのために尽力し、国づくりには人づくりがかかることができないとの長年の思いから自身で1991年4月にドンズー日本語学校を設立し（本校）、その後たくさんのベトナムの青年を日本に留学させています。そして、ドンズー日本語学校も現在7分校（ホーチミン市5校、郊外1校、ダナン1校）とベトナム語1校がホーチミンの中心にある。学生数はホーチミン3700人、ダナン300人です。

日本語学校には初級クラス（N4レベル）576コマ、中級1クラス（N3レベル）1152コマ、

中級2クラス（N2レベル）1440コマ（1コマ45分）、上級クラス（N1レベル）1728コマがあり、日本に留学できるレベルになるには約5年掛かるとのことでした。授業料はコースによって異なりますが、288コマの一番最初のクラスは460万ドン（＝2万円）です。学習者の中に大学生が多いですが、専門は日本語ではなくて、経済、技術、銀行などいろいろです。学生の半分は大学生とのことですが、大学にも日本語学科があるのにドンズーに来るのは、ドンズーが日本語教育のノウハウを持っており、長年の実績があるからとのことでした。また、ベトナムの日系企業で上昇志向がある人も勉強に来ているとのことでした。

翌日、ドンズー日本語学校からの紹介の通訳ゲエン・キエウ・カンさん（九州大卒、経済学）の案内で、ホーチミン市の一般の診療所や外国人と富裕層が利用する病院まで、様々な医療施設を見学しました。

ホーチミン市の国立チョーライ病院の受付で写真を撮っていたところ、警備員が寄っ



国立チョーライ病院 総合受付（ホーチミン市）



透析患者村で（向かって右から2人目がムイ先生）

てきて、私達が日本人とわかるとその病院が日本のODAの支援で建てられた旨のプレートを見せて、JICAから派遣されている日本人の医療者が常駐していることを教えてくれました。その理学療法士の山本さんとも面談できました。山本さんからは、それまで全死亡者数の50%強を占めていた感染症疾患が2005年には20%を下回り、生活習慣の変化が原因と考えられる循環器系の疾患、糖尿病、がんなどの非感染症疾患による死亡者数が62%を占めるようになってきているとのことでした。

た。山本さんの通訳は、私たちの通訳をしてくれたカンさんの日本語の先生であることもわかり、ドンズー日本語学校の関係者の活躍を垣間見ることもになりました。

翌日ハノイへ移動し、ご紹介いただきましたフィン・ムイ先生（タンロン技術単科大学：THANG LONG COLLEGE OF TECHNOLOGY 創設者）とその日本語学科の先生たちによる通訳で、透析患者村を訪れました。人工透析を受けられる施設がまだ大都市に集中していることもあり、治療を受ける為に、全国から119人もの患者さんが住んでいる集落があるのです。

外資系企業も多く進出し、高級外車も走り抜ける首都ハノイの街に、こうした慢性腎臓病の患者が集団で暮らす村がある事に私たちは大変驚くとともに、これからの国を背負う20代や30代の若い患者が多く見受けられたことに強い衝撃を受けました。このことが、私たちが慢性腎臓病の予防から予

ベトナムの拠点病院の状況（2008年）

	バクマイ	チョーライ
病床数（計画）	1500	1400
平均患者入院数	2848	2700
満床率	177%	193%
総職員数	1879	2857
医師数	415	583
総手術件数	9500	35645
予定手術	4832	21352
緊急手術	4668	13293
救急症例／日	71	261

満床率が以上に高く、一つのベッドに複数の患者を収容することもあり、患者サービスの質の低下や、院内感染の危険を招いている。ただし病院は増床・増加傾向にある

後に至るまでの包括的な支援の必要性を考える大きなきっかけとなりました。

翌月曜日、ムイ先生の紹介で国立バクマイ看護学校のハン校長先生はじめ医療者の方々と面談し、教室で授業中の学生の皆さんへもご挨拶をしました。現場の医療者の意見から看護・介護の関係の質を高めれば、衛生管理の向上がはかれることから看護教育支援のニーズがあることも分かりました。

同様にバクマイ病院透析センターの見学をさせていただき、透析科副科長のズン先生にベトナムの透析治療の実情を伺いました。病院には透析機器の修理部門もあり、故障している機器を病院の技術者が直していました。日本では使用目安が10,000時間までとされる透析機器を、ベトナムでは60,000時間まで使っていること、日本では1回ごとに廃棄するフィルターも6回まで再利用している現状



国立 BACH MAI 病院 (Hanoi) - ベトナム北部の拠点病院
日本の ODA で新病棟建設

ベトナムの医療施設 (概要)



出典: 国立国際医療センター「ベトナム国における保健医療の現状」2010より

13.2.23

All Rights Reserved © Tokyo Vietnam Project

16

をみて、技術面、衛生面からも日本の医療者、医療系企業がベトナムに協力できる分野が数多くあることを感じ、今回のプロジェクトを通し、それを少しでも実現できればと考えています。

その日の夕方はムイ先生の学校タンロン技術単科大学を訪問しました。大学は主にCADを扱う電子設計専門科と日本語学科があります。大学の日本語学科は10クラス、

学生は300人くらいとのことでした。ここでムイ先生から今回のスタディ・ツアーで“一番!”美味しいベトナムの家庭料理をご馳走になりました。ムイ先生の数々のご厚意に感謝し、またプロジェクトが具体化した時のご協力をお願いをしてきました。

また、ムイ先生からはベトナムでの企業活動、特に日系企業の人事政策についてのアドバイスもいただきました。「単純作業などを繰り返しさせるのではなく、その



手前がムイ先生、隣は石渡氏

人の能力にあった仕事をさせながら、経営者が長期的な視野で人材育成を考えるべきである」とのお話がとても心に残りました。

ベトナムから帰国後、私たち立教ベトナムプロジェクトの「医療・介護」メンバーは、ベトナムの医療支援に長く携わってこられた医師や慢性腎臓病の専門医の方々と協議を始めました。プロジェクト実施にあたっては外部の方々にもご参加いただくことから、運営資金の面においても大きな課題があります。しかし、私たちはこれまでご支援をくだ

さった皆様の想いを胸に、日々慢性腎臓病と闘うベトナムの患者さんと医療者の方々のお役に立てるよう、この「日越友好40周年記念 慢性腎臓病の治療と技術支援ならびに看護教育支援プログラム」をぜひ実現したいと考えています。このプログラムにご関心をお寄せの方々には今後ぜひともご支援、ご協力をお願いしたく思っております。

ABK、ホエ先生、ムイ先生をはじめ色々な方のご協力で今回のホーチミンとハノイでのスタディツアーが大変意義のあるものとなりました。関係者の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



バクマイ病院にて。左から2人目が石渡氏、同3人目が廣瀬氏、同5人目がムイ先生

立教ベトナムプロジェクト事務局

石渡荘介（ABK留学生友の会 代表） email: sosuke51@hotmail.co.jp

廣瀬園子（株式会社 Medi Legato 代表取締役） email: hirose@medilegato.co.jp



気仙沼湾と市街地：来気した友人の背景は街並みがスッポリ消えている



鹿折方面：3.11の夜、燃えた石油タンクで大火事になった地区



満潮のエースポート前：満潮時には海水が流れ込む。以前は繁華街



第18共徳丸：打上げられたマクロ運搬船。保存か撤去か二分

速輸送システム）が代替します。今回の震災で大被害を受けながら孤立状態になってしまった大島と市を結ぶ架橋工事も決まりました。

皮肉にも震災がきっかけとなり、半世紀に亘る悲願を実現させたのです。また、首都圏を始め各地で物産店を開いたりして、水産業だ

けでなく気仙沼の各産業も売り込んでいます。更に当地の風物詩となっている港まつりや天旗まつり等、震災で中断していた各種行事が復活してきました。変わったところでは、あの混乱状態の中で少しでも人々を元気にしたい、と結成された当地アイドルグループ「SCKガールズ」が全国トップ一〇入りして活躍しています。SCK

所はまだ整備されていない状態であり、非常に残念です。震災後、当地に来た友人達は災害の凄惨さを目の当たりにし、「こんなに酷かったのか！」と驚きます。報道で見たものと現実との度合いが全く違う事を思い知らされるはずです。或る友人は「子供に是非見せておかなければ」との思いで来気予定をしています。

今現在の姿を多くの方に見て頂き、災害への意識を高めて欲しい、と思う一面、早く震災前に戻り、洋々とした太平洋をバックに入江と岬の造形美が素晴らしい本来の気仙沼を見て頂きたいと願っています。まだまだ形として見えてくるには長い道のりが予想されますが、今日までの皆様方からの温かいご支援に感謝致しますと共に、これからも引き続き被災地へご関心を持ち、見守って頂ければ、私達の大きな支えとなります。宜しくお願い申し上げます。

気仙沼は漁港として知られていますが、陸中海岸国立公園に指定された風光明媚な所でもあります。訪ねてくれた方には必ず見て頂きたい素晴らしい景観の場所が点在していました。現在、それらの場

読者寄稿

気仙沼の復興状況

栗原静子



2011年、消して忘れられぬ出来事となった3.11東日本大震災。世界中に大きな衝撃を与えたあのツナミの被害から、早2年が経とうとしています。今、現地の復興の状況はどうか。被害の大きかった宮城県気仙沼市在住で当協会（ASCA）会員の栗原さんがご寄稿をお寄せくださいました。

間もなくあの悲惨事となった東日本大震災から二年目の三月一日を迎えます。この二年間、様々な悲しみ、困難を乗り越え、どれ程の復旧、復興がなされたのか、余りに被害規模が広すぎて、被災地に住む私でも把握できておりません。当市の犠牲者は二二七七人、行方不明者二四三人、市民の約二割に当たる二二〇〇人が仮設住宅で生活しています。そして今でも、新聞に身元判明者として犠牲になられた方のお名前が載ります。まだまだ続いている大震災の傷跡です。

市の広報によると、昨年の一〇月現在、復興計画一九四の重点事業の実施・進捗状況は、計画を上回る：四事業／計画通り：八八／課題があるが前進：七九／問題あり：一九／完了：四となっております。中々思い通りには進んでいないように思えます。

気仙沼は湾がかなり入り組んで

いる上、背後に山が控えているので住宅用地の確保が難しいとか、瓦礫が海底に堆積し、漁業活動の妨げになる等、漁港特有の問題があつてか、被災地の中でも復興が遅れていると言われています。現在、特に防潮堤と土地の嵩上げが問題視され、防潮堤そのものの賛否や嵩上げの指定範囲など、旧来の制度では対応しきれず、逆に復興の足かせになっているとの声も聞かれます。被災地の要望を汲み取って進めるとは中々いかず、要は使い勝手が悪いというもの。それでも三年目に入る今年は様々な事業を加速すべく、復興予算の確保や適切な制度の運用等を政府に要望しており、つい最近、対策費が六兆円上積みされ五年間二五兆円となるなど、復興に弾みが付きそうです。

面白い話題もあります。こんな状況の中でも漁港気仙沼の意地を見せてくれました。昨年、港機能の復旧に伴い、全国主要漁港の年

間取扱高の数量で一二位、金額で一二位にランキングされました。震災前の二〇一〇年は数量で九位、金額で八位でしたので大健闘です。涙が出るほど感激したのは災害のあつた二〇一一年に絶対叶わないと思われた生鮮カツオの水揚げが一五年連続一位になった事。昨年も引き続き一六年連続の王座に着きました。関係者の努力と熱意の賜物、と同時に他県からの応援が後押しをしてくれたと感謝しています。多様な漁港機能の回復はなお一層、水産業界を勢い付けさせてくれるでしょう。

また、当地から小野寺五典防衛大臣が就任した事も初めての大臣誕生で盛り上っています。担当分野は異なりますが、被災地として大いに期待と心強さを感じています。

他にも様々な動きがあります。海岸線を走る鉄道は未だ復旧見込みが付かず、当面BRT（バス高



※ 各情報の詳細は主催団体ホームページ等でご確認ください。奨学金情報は、日本留学情報データベースサイト = JPSS (<http://www.jpss.jp/ja/>) にて検索が行えます。

しょうがくきんじょうほう 奨学金情報

■ さがわりゅうがくせいしょうがくざいだん 佐川留学生奨学財団

対象：東南アジア諸国の国籍を有する私費外

国人留学生で2013年4月1日現在において

次の要件をそなえる者。①学部3年次及び

6年制学部コース(医・歯・獣医・薬学部)

の5年次に進学する者 ②大学院修士課程

(博士前期課程)の1年次に入学する者 ③

大学院博士後期課程2年及び4年制博士課程

(医・歯・獣医・薬学部)の3年次に進学す

る者 ④学業・人物ともに優秀で、かつ健康

であり、現実に経済的援助を必要とする者

⑤原則として2013年4月1日現在で、年齢

が学部生は27歳未満、大学院学生は35歳

未満であること ⑥他の奨学金を受けていな

い者 ⑦国際理解と親善に関心を持ち当財団

の交流活動に積極的に参加する意思のある者

給付金額：月額10万円

給付期間：2013年4月から2015年3月ま

での2年間

採用人数：16名

応募方法：大学の担当窓口を通して

募集締切：4月17日(水)(当日消印有効)

主催・問合先：公益財団法人 佐川留学生奨学

財団事務局 〒600-8009 京都市下京区四条

通室町東入函谷鉾町79 ヤサカ四条烏丸ビル

9F Tel 075-255-9310

URL <http://www.sagawa-ryugakusei.or.jp/>

しゅくしやじょうほう 宿舎情報

ぶんかかいかん にゅうかながくせいとくべつぼしゅう アジア文化会館 (ABK) 入館学生特別募集

アジア文化会館 (ABK) は、財団法人アジア学生文化協会によって1960年に創設されたアジア、アフリカ、ラテンアメリカからの留学生と日本人学生の共同生活の場で、地域に開かれた『ABK 秋祭り』(10月下旬開催予定、屋台・パフォーマンス他)等の行事および月例会(金曜

日(に)夜(や)等(ら)によって自治(じち)的(てき)共同(きょうどう)生活(せいかつ)を運(う)営(えい)し、それを通(つう)じて人(にん)間(げん)形(けい)成(せい)と国(くに)を超(こ)えた友(ゆう)情(じょう)育(いく)成(せい)に努(つと)めています。この度(たび)、下(した)記(ぎ)の通(つう)り入(にゅう)館(くわん)学(がく)生(せい)の募(も)集(しゅう)を行(い)いますので、ど(ど)うぞお申(もうし)込(こ)み下(くだ)さい。

申込(もうしこみ)資(し)格(かく)： 次(つぎ)の4(よ)項(こう)目(もく)の全(ぜん)てに該(がい)当(とう)する方(かた)。 a. アジ(し)ア、アフリ(ふり)カ、ラテンアメリ(しよこく)カ諸(しよこく)国(こく)の留(りゅう)学(がく)生(せい)および日(に)本(ほん)人(じん)学(がく)生(せい) b. 日(に)本(ほん)国(こく)内(ない)の大(だい)学(がく)、大(だい)学(がく)院(いん)、短(たん)期(き)大(だい)学(がく)、専(せん)門(もん)学(がく)校(こう)に在(ざい)籍(せき)する学(がく)生(せい) (日(に)本(ほん)語(ご)別(べつ)科(か)の学(がく)生(せい)、研(けん)究(きゅう)生(せい)、科(か)目(もく)等(ら)履(りふ)修(しゅう)生(せい)、聴(てい)講(きやう)生(せい)等(ら)を除(ぞく)く) c. 共(きょう)同(どう)生(せい)活(かつ)の義(ぎ)務(む)を互(たが)いに果(は)たし、自(じ)治(ち)の権(けん)利(り)を展(てん)展(てん)さ(さ)せる生(せい)活(かつ)に積(せき)極(ごく)的(てき)に参(さん)加(か)する意(い)志(し)が有(あ)り、条(じょう)件(けん) (金(きん)曜(よう)日(にち)の夜(や)にアルバ(ら)イトやゼミ等(ら)を入(い)れな(な)い下(くだ)さい)を満(み)たす学(がく)生(せい) d. 日(に)本(ほん)語(ご)でコミュニケーシ(み)ョンがで(で)きる学(がく)生(せい)。

募(も)集(しゅう)人(にん)数(すう)： 3(さん)名(な) (女(じよ)子(し)のみ)

申(もうし)込(こ)方(か)法(ぽう)： 随(ずい)時(じ)申(もうし)込(こ)みを受(う)け付(つ)けま(ま)すので、ま(ま)ずはメー(めー)ル kaikan@abk.or.jp でお問(と)合(あ)せく(く)だ(だ)さい。手(て)続(じょく)きのご案(あん)内(ない)を(を)し(し)ま(ま)す。※ 定(てい)員(ぎん)に(に)なり次(じ)第(だい)募(も)集(しゅう)を縮(ちぢ)め切(き)りま(ま)す。

入(にゅう)館(くわん)日(にち)： 3(げ)月(げつ)下(か)旬(じゆん)～4(じよう)月(げつ)上(じやう)旬(じゆん)

経(けい)費(ひ)： 部(へ)屋(や)代(だい) 38,000 円(えん)/月(げつ) (冷(れい)暖(だん)房(ぼう)、水(すい)道(どう)光(こう)熱(ねつ)費(ひ)、イン(いん)ターネ(と)ーネ(と)ットを(を)含(ふ)む。コ(こ)イン(いん)ラ(ら)ン(ら)ン(ら)ー(ら)ーは(は)自(じ)己(こ)負(ふ)担(たん)。)、入(にゅう)館(くわん)料(りょう) 70,000 円(えん) (返(へん)還(かん)し(し)ま(ま)せ(せ)ん)、月(げつ)例(れい)会(かい)費(ひ) 500 円(えん)/月(げつ)

設(せつ)備(び)： [個(こ)室(しつ)] ベ(べ)ッド、机(つくえ)、椅(い)子(し)、室(しつ)内(ない)照(しやう)明(めい)、電(でん)気(き)ス(す)タ(た)ン(ん)ド、電(でん)話(わ)機(き) (受(じゆ)信(しん)専(せん)用(よう)、エ(え)ア(あ)コ(こ)ン、ク(く)ロ(ろ)ーゼ(ぜ)ット、本(ほん)棚(だな)、イン(いん)ターネ(と)ーネ(と)ット LAN 配(はい)線(せん) [共(きょう)用(よう)] 自(じ)炊(し)室(しつ)、ト(と)イ(い)レ、洗(せん)面(めん)所(じよ)、シャ(しゃ)ワ(わ)ー、コ(こ)イン(いん)ラ(ら)ン(ら)ン(ら)ー、卓(たつ)球(きゅう)場(じやう))

在(ざい)館(くわん)期(き)限(げん)： 原(げん)則(そく)と(と)して、入(にゅう)館(くわん)時(じ)の課(か)程(てい)を修(しゆ)了(りやう)するま(ま)で。(な(な)お毎(まい)年(ねん)度(ど)末(まつ)に自(じ)治(ち)的(てき)な共(きょう)同(どう)生(せい)活(かつ)への参(さん)加(か)実(じ)績(せき)か(か)ら継(けい)続(ぞく)の可(か)・不(ふ)可(か)を決(けつ)める審(しん)査(さ)が有(あ)ります。)

申(もうし)込(こ)書(しよ)請(けい)求(きゅう)・問(と)合(あ)せ先(せん)： 113-8642 東(とう)京(きやう)都(と)文(ぶん)京(きやう)区(く)本(ほん)駒(こ)込(こ) 2-12-13 アジ(し)ア文(ぶん)化(か)会(かい)館(かん) (ABK)

Tel.03-3946-4121、URL:http://www.abk.or.jp、E-mail:kaikan@abk.or.jp



アジア文化会館

MEMBERS

〈ご入会とご寄付の報告〉

2012年12月

賛助会員

(1口)

佃 吉一 板橋区

正会員

(2口)

榊 正義／正子 港区

(1口)

小田中 聡樹 仙台市

国土舘大学 国際交流センター

世田谷区

福井 道子 豊橋市

二村 美朝子 練馬区

伊藤 順 安曇野市

早乙女 和義／博子 品川区

池野 朋彦／晶子 横浜市

鶴尾 能子 横浜市

新田 宜子 西東京市

古川 恵世 我孫子市

西田 祥子 安城市

代田 泰彦／ますよ 所沢市

田井 亮吉 神戸市

石渡 荘介 足立区

A・W 横浜市

是松 恭治 横浜市

野村 美知子 佐倉市

近山 武子 横浜市

高木 桂子 墨田区

川口 善行 大田区

菅谷 真人 千葉市

中畠 正喜 川崎市

勝山 桂香 千葉市

佐々木 孝一 文京区

安藤 哲生
牧野 政子
北林 保之
斎藤 伸子
高柳 直正
永田 隆彦／恭一
寺門 克郎
高橋 雄造
小林 浩
鈴木 秀明
工藤 幹雄
米林 太久実
福 壤二
菊池 幸子
浜崎 長寿／和子
小笠原 靖子
小原 正敏
吉原 エツ子
久保 亨
井上 駿
田守 智恵子
曾根 文子
(有)ブルミエ (アクア)

小川 輝夫
松岡 弘
田中 洋一
香月 恵美子
林 登居／ひさ子
中元 管根
富永 昭太郎
堀 香奈美

ご寄付

太田 三郎／京子 神戸市
斎木 史 足立区
辻 昌徳 国分寺市
奥山 節子 西村山郡
小野 浩司 横浜市
田守 智恵子 札幌市

小金井市
宝飯郡
中川郡
豊橋市
北区
川内市
習志野市
杉並区
松戸市
豊橋市
文京区
品川区
横須賀市
笠間市
堺市
相模原市
土浦市
始良市
文京区
平塚市
札幌市
杉並区
松戸市
上尾市
相模原市
柏市
川西市
八千代市
西之表市
町田市
横浜市

東京第一友の会
伊佐 玲子

豊島区
下都賀郡

2013年1月

特別会員

(1口)

張 瑞騰 台湾

正会員

(1口)

池田 俊二 横浜市

渡辺 穰二 越谷市

田中 千佳子 江東区

清水 国夫 中郡

(社)東京都専修学校各種学校

協会 渋谷区

愛知淑徳大学国際交流センター

長久手市

大益 牧雄 京丹後市

中原 和夫 那覇市

山本 仁 伊東市

松崎 松平 世田谷区

水戸アカデミー 水戸市

ご寄付

栗原 静子 気仙沼市

中原 和夫 那覇市

今回もたくさん
の御協力をいた
だき、ありがと
うございました



A B K 同窓生募金 (2013年1月31日現在)



ご協力ありがとうございました。募金のご報告は『アジアの友』並びに同窓会ホームページ
 < <http://www.abk.or.jp/abkd/fund/houmeiroku.html> > で随時ご報告させていただきます。

●目標額：5,000万円

●募金額：47,162,142円 (目標残：2,837,858円)

●寄付者数：848件

〈 〉内は出身・在住国、地域、ABC順

＜日本＞ 岩井秀生、川崎依邦〔(株)シーエムオー〕、菊池幸子、工藤幹雄、松岡弘、中原和夫、大越英男、斉木史、曾根文子、高木桂子、高橋作太郎、田中洋一 <マレーシア> SIA OOIPOH <台湾> 張忠信、林登居・ヒサ子 他匿名1

以上、16件

2012年11月30日以前の寄付者(832件)

バングラデシュ A.K.M. Moazzem Hussain、Hashimoto Islam Nurul (橋本イスラム・ヌール、在日)

ブラジル Alberto Tachibana、Alice Nakamori、Francisco Ishihara、Hashiguchi Mariuza、Hiromu Onishi (大西博巳)、Matsubayashi Marcia、Mizuma Tachibana Aiko、Nelson Yamakami、Sekiya Tachibana、Tomooka Tizuko、Yamauchi Atsushi、Yamauchi Kazuko

カナダ Chang Sou Wah (張素華、香港)

中国 【C】 Cai Jian Ping (蔡堅平、在日)、Chen Hong Zhen (陳洪真)、Chen Xian (陳獻) 【D】 Dai Zhi Jian (戴志堅 / 陳艷萍、在日) 【G】 Gao Rong (高榮) 【H】 Hironaka Gunji [広中軍二 (李軍、在日)] 【J】 Jia Fu Zhong (賈輔忠)、Jia Hui Yi (賈蕙萱)、Jin Qiu (金秋)、Jing Dong Huan (金東澣) 【K】 Kuo Nan Yan (郭南燕、在日) 【L】 Lee Chun Li (李春利、在日)、Li Chen Xi (李晨曦、在日)、Li Hui Chun (李惠春、在日)、Liu Ming Hua (劉明華)、Liu Ying Chun (劉映春)、Liu Yue (劉越、在日)、Lu Xin Yi (呂新一、在日) 【M】 Meng Ling Hua (孟令樺 / 計宇生、在日)、Meng Xiao Xiao (孟瀟瀟) 【N】 Ni Yu (倪玉) 【O】 Ou Yang Fei (歐陽菲、在日) 【P】 Piao Shun Yu (朴順玉) 【Q】 Quang Hao (全浩) 【S】 Sha Liang Xiang (沙蓮香)、

Shang Jie (尚捷、在日)、Sun Qian Jin (孫前進) 【W】 Wang Wei (王巍)、Wang Wen (王穩)、Wei Qing Ding (魏慶鼎) 【Y】 Yan Hao (嚴浩)、Yang Yi Fan (楊一帆) 【Z】 Zhan Xin (張新)、Zhan Xin Wang (張新旺)、Zhang Hang (張航)、Zhang Yong (張勇、在日)、Zhou Xiang (周翔・黄軼)、張建敏

ドイツ Heng Fu Chong (マラヤ)

香港 Chan Sui Ngan (陳小雁)、Choi Man Wa (蔡敏華)、Leung Chi Shun (梁志瞬)、Yeung King Hong (楊經航) / 蔡金燕 (マレーシア)

インド AAAWI (AOTS Alumni Association of Western India)、A. P. Wagle、ABK-AOTS Dosokai Chennai Center、Abul Sharah、Ashok Saraf、Grug Kumar (雅留宮久麿 (在日) / 澄子 (日本))、M. Ramamurthy

インドネシア Budhi Setiawan Kohar

イラク Mudhafar Al. Jabiri

カンボジア 忍足林基 (在日) / 美恵子 (日本)

日本 【A】 ABK 留学生友の会、赤星裕、新谷美紀子 / 美也子、安藤哲生、新井敬二・由利、新井重光、荒川雄彦、アジアの新しい風 【C】 Ch atty B.Q. (ワタナベ)、近山武子 (3)、千野克子 【F】 藤原一枝、深澤のぞみ、福譲二、福本一、古川恵世、布施知子 【G】 50周年事業委員会売上 (5) 【H】 濱田洋子、浜崎長壽 / 和子、秦幸吉、橋口真人、林均、樋川好美、平井まりこ、平峯克、平岡昭子 (2)、平田熙、広江重徳、帆刈礼子、堀香奈美、堀幸夫、堀内智代子、細川哲士、穂積亮次 【I】 井出遊、飯沼英郎、池田俊二、池森亮介、池野朋彦・晶子、池添尚行、稲垣敏彦、井上恵子、井上駿、犬塚雄大、伊佐玲子 (2)、稲澤宏一、石原廣、石原誉慎、石井信彦、石川毅・優子、伊藤郁子、伊藤順 (3)、伊藤源之 (2)、岩井秀明 (2)、岩尾明、岩佐佳英、岩崎幸子 【K】 甲斐等、加倉井弘行 (2)、兼重節、兼重道雄、兼重智雄、勝部純基、香月恵美子 (2)、河合秀高、川上剛 (2; 在スイス)、川崎依邦 (OCE)、北マツ、北川泰弘、北原千絵、北山文泰 (3)、倉部絹代、小林浩、小林泰子、小宮信介、金野隆光 (3)、久保哲也、久保木裕一郎、工藤正司、工藤幹雄 (5)、熊沢敏一、倉内憲孝、栗原静子 (2)、黒田一雄、黒羽宏、久津間優子 【M】 町田恵子、町田航、牧美保子 (2)、槇操、馬杉栄一、松平吉世、松井正枝 (2)、松岡弘、松崎松平 (2)、真弓 忠、宮野尾光正、宮内俊治、水須善幸、森尾正照、森下明子、村田忠禧、村山秀男 【N】 中原和夫 (2)、中畠正喜 (2)、中嶋源吾、中元菅根 (2)、中村洋一、中野正明、中曽根信 (3)、日本養成学会、西田祥子、西垣宰朋 (2)、西原彰一、西嶋勝彦、西川恵、西本梶、西村清人、西谷隆義 (2)、新田宣子 (2)、仁田裕子、野田 (小金丸) 春美、野口明美、野村美知子 (3) 【O】 小田中聡樹、小川巖、小川輝夫、小木曾大 (2)、小木曾建 (2)、小木曾友 (3)、小倉尚子、小原正敏、大西一郎、岡島昭治、岡崎道子 (2)、大木直美、大久保伸枝、大野大平、大里浩秋、大島光恵、岡部洋一、奥山節子、奥山義夫、大村光、小野寺武夫、小野里光博、大澤龍、忍足絵美、忍足眞理、大杉立、大谷里恵子 【R】 六文会 【S】 斉木史、斉藤雅史、齋藤美知子、齋藤やす子、酒井杏郎 (3)、榊正義・正子、酒巻彩乃、坂元ひろ子、三溝弘悦、早乙

女和義・博子、佐藤郁夫、佐藤正文 (2)、佐藤玲、澤登千恵子 (3)、関正昭、渋谷寧伸、清水国夫、清水勇治・泰代 (2)、篠塚景市、白石勝己、白石勤、白鳥文子、代田泰彦、尚美学園大学国際交流センター、染谷公久、染谷誠、總寧寺、菅原照代、杉本宏樹、杉浦貴和子、杉山兼一、栖原暁、鈴木繁、鈴木智、鈴木八重子、鈴木順子【T】田川明子、田口久美子、田口昌子、田尻英三、高道俊彦 (3)、高木桂子、高橋喜久江、高橋満、高橋作太郎 (2)、高橋幸枝、高橋雄造、高野靖子、高柳直正、竹林惟允 (3)、竹田肇・和子 (2)、竹嶋俊紀、宅間薫 (2)、田守智恵子 (2)、田中千佳子、田中雅幸、田中美智子 (2)、田中利恵子、田中紳一郎、田中多美子 (2)、田中稔子・静子、谷口哲雄、寺門克郎 (2)、寺尾方孝・三枝子、寺沢宏次、田井満里、田井良知、田井亮吉、戸田清、鵜田純一・由美 (3)、東京華僑総会、富岡昭二郎、外山経子 (10)、豊島由久、土屋元子 (2)、土屋幸子、佃吉一 (2)、鶴尾能子 (2)、堤祐子 (2)【U】内山敦之、宇戸清治、上高子、上田菜生、植田泰史、畝本昌介、漆蔦才子【W】渡辺譲二、【Y】藪下勝、山田健一、山田守一、山田裕子、山口憲明 (3)、山本斉、山本出、山本章治、山野井昭雄、山之内正彦・萩子、山下靖典、山海保、山崎光郎 (4)、山口誠、依田良子、横山昌幸、横沢喜久子、横山昌幸、吉原秀男、吉田裕子、吉田菜穂子、吉原エツ子、吉川英一 (在中国)、湯山佳代、匿名希望 (4名)

韓国 崔銀珠 (在日)、Hahn Young Khoo (韓英鳩)、西原景哲 (在日)、Oh Bum Suk、Youn Seong Kook (尹誠國、在日)、Woo Su Keun (禹守根、在中国)

ラオス Chanthasone Inthavong (在日)

マレーシア 2012年ABK在館マレーシア留学生、2011年11月12日留日学生同窓会パーティー同【A】Adelyn Ngo、Amy Tan (陈春莲)、Alan Tan Yu Poo、Ang Gi Moh (洪以谋)、Ang Khoon Chye (汪坤才) (2)、Ang Lip Chee (洪立志)、Ang Sheng Feng (洪巧芬)、Ang Wan Leng、Apple Vacation & Conventions Sdn. Bhd. [苹果旅游有限公司; Koh Yock Heng (許育興)], Ariel Cheng (鍾欣霖)、Aw Leong Gee (欧良義)【B】Beh Chor Kim、Beh Teck Chuan、Boon Woo Seng (温武成)【C】CM Aung、Cha Yee Seng (謝宇誠)、Chai Koo Peng、Chan Huan Pang (曾煥邦、2)、Chan Kok Foo (陳国富)、Chang Chew Chin (張昭成) (3)、Cheang Chuan Ley、Cheang Sai Keong (シンガポール)、Charles Chow (邹贵璋)、Chaw Kam Shiang (周錦生)、Cheah Soo Lin、Cheong Bee Nah (鍾美娜)、Chew Ching Seng (周昌盛) (2) /Low Kim Lee (刘金莉)、Chew Fook Keong (周福强) / Goh Ger Teng (呉月婷)、Chia Hong Hyiap (謝鴻業)、Chia Li Teck (謝礼得)、Chia Mee Hang (蔡美賢)、Chin Yok Wan (陳玉旺) (2)、Chin Saw Kiun (陳少勤、在日)、Chiu Jin Eng (冰周人英) / 林惠冰、Chong Piang Wee (张炳辉)、Chong Teek Foh (張德福) (2) /Chow Soo Lin、Choo (2)、Yun Fah、Choong Chee Yee、Choong Yoon Seng、Chow Kwee Lin (邹貴仁)、Chuah Yeon Hang (蔡耀漢) / Keong Chin Huai (強青懷)、Chuan Seong Tiang (Jeff Tiang)、Chuei Wai Kong (朱威金光)、Clifford Lee (李進才)【E】Ee Ley Tiong (余励忠) (2)【F】Fong Cheong Thiam (洪昌添)、Fong Wee Keat、Foo Hee Hiang (符氣強) (2)、Foo Keah Keat、Foo Ming Lian (符明蓮)、Foo Siang Seng (符祥盛) (2)、Foo Soo

Kong (符素光) (2)、Foo Yuki (符優綺) 【G】 Gan Kok Seng (顔国成)、Gan Seu Kian (顔綉涓)、Gan Teck Yeow (顔得耀) (2)、Goh Peng Ooi、Goh Swee See (吳瑞獅) 【H】 Ham Poh Can (范宝权)、Ham Poh Chyan、Heong See Yoon (香世运) (2)、Hew Boon Thai、How Chai Nguan (侯再源) 【J】 Joan Wai Kim Foh 【K】 Kang Chin Yeh (江晋業)、Kenneth Wong (黃復翔) (2)、Kevin Ng (吳錦強)、Khu Hwa Leng (邱華龍)、Koh Hong Hwee (許鴻輝)、Kong Guan Wie (江元偉)、Kong Kwee Song (江回松)、Kong Sian Shih (江幸柿) 【L】 Lai Yoon Poh (賴永保)、劉・有村開順、Lau Kok Yong (劉国栄)、Lau Sau Hong (劉少峰、在日)、Lau Shiang Horng、Lau Weng Wah (刘润华)、Lee Check Poh (李志保) /Ng Sui Ying (黃瑞英)、Lee

2013/1/31 現在 ABK 同窓生募金国別集計

国・地域	件数	合計額	備考
日本	368	19,968,712	含、在外/同一人複数回
マレーシア	319	13,716,656	含、在外/同一人複数回/日本人26/シンガポール1
タイ	51	6,856,007	内日本人17
中国	42	2,455,000	含、在外/在日他
ベトナム	7	1,423,000	含、在日
ブラジル	14	657,627	
韓国	7	420,000	含、在日他
カンボジア	1	300,000	在日
シンガポール	8	380,140	含、在日
インド	7	190,000	含、在日
香港	4	170,000	
台湾	12	485,000	含、在日
ミャンマー	1	50,000	
バングラデシ	2	40,000	含、在日
イラク	1	10,000	
インドネシア	1	10,000	
パキスタン	1	10,000	在日
ペルー	1	10,000	在日
ラオス	1	10,000	在日
合計	848	47,162,142	
目標残		2,837,858	

Chee Heong (李志雄)、Lee Kian Ling (李建霖)、Lee Kian Ling (李健霖)、Lee Kong (李廣) /Lam Chok Yak (2)、Lee Leong King (黎亮景)、Lee Liong Mui、Lee Miow Ying (李妙英)、Lee Mow Tiam (李茂添) (2)、Lee Tee Boon (李智文) (2)、Lee Tiam Hing (李天興)、Lee Yuet Keong (呂月強) /Kek Sai Fong (郭思坊)、Leong Khee Hoo (梁其和) (2)、Leong Thiat Eng (梁德栄) (2)、Leong Wing Sum (梁永森)、Lew Kim Song (劉金雄) (2)、Liau Kok Wee、Liaw CK (廖俊光)、Liew Teck Boon (劉徳文) (2)、Lim Bok Hek (林木火)、Lim Chee Tian (林志田)、Lim Chin Kok、林月秋 /傳亮 (中国)、Lim Chin Ee (林振意) (3)、Lim Chong Chan (林忠賛)、Lim Hock Lai (林福来) (2)、Lee Li Soon、Lim Liong Chu (林良住)、Lim May Yan (Mmrcia Lum May Yan) (2)、Lim Peng Jin (Scientex Japan Co., Ltd.)、Lim Sin Yean (林欣燕)、Lim Soon Hang (林順桁)、Lim Suat San (林雪

珊)、Lim Tian Huat (林天发)、Lim Yok Chai (林意財)、Loh KC (羅国俊)、Loke Hon Yee (陆汉宇) (2) / June Tan (陈素芯)、Low Cho Kee (刘助基)、Low Han Peng (刘汉平)、Low Kim Lee (劉金莉)、Low Leong Meng (羅亮明)、陸培春留日センター、Lwee Lew Chen (雷柳菁)、Lwee Yuen Chiang (雷远江)、Lwee Yuen Tung (雷远东) 【N】 Na Chin Teong (藍振忠)、Ng Chee Meng、Ng Chin Keong (黃振強) (2)、Ng Chuan Aik (Tony Cang ; 黃泉毓)、Ng Eng Hooi (黃永輝)、Ng Kim Chai (黃金財) (2)、Ng Mee Wah (吳劍華) (2)、Ng Teong Guan (黃忠元)、Ng Thian Eng (黃殿英)、Ngiam Tee Seng (嚴世清) (2)、Ngwan Boon Ming (阮文明) 【O】 Ong Cheng Chuan (王清川)、Ong Cheng Han (王清漢)、Ong Ching Long (王建龍)、Ong Chooi Lee (王翠莉)、Ong Poh Heng (王宝慶)、Ong Thye Beng (王泰明)、Ong Wei Bing、Ong Yee Meng (王玉明) 【P】 Pang Choon Boon (彭俊文)、Pang Pow Kwee (方宝貴)、Pang Yuet Hueng (彭月紅)、Phang Siew Kiong (彭修强)、Poh Siew Hui (傅秀慧)、Puah Chin Chye 【Q】 Quah Saw Ting、Quah Soh Teah 【S】 Sam Cha Peng (覃澤平)、Seah Boon Chieng (謝文清)、Shia Wei Jong (余維忠)、Siau Fook Siong (箫福祥)、Siew Kooi Kam (萧钜金)、Siew Moey Yen、Siew Soke Lee、Sim Ee Looi、Sim Eng Kang (沈永江)、Sim Kee Hong (沈其豐) (2)、Sim Kim Ling、Simon Liow (廖天發) / Ho CL (何俟伶)、Soo Ka Jin、Soo Kee Chee (蘇克智)、Soh Keh Woei (蘇克偉) (2)、Soo Seck Heng (苏锡兴) (2)、Soon Kian Seng (孫健勝)、SKK Kaken (M) Sdn Bhd、Soon Sai Kheng (宋世勤)、Stanley Lian、Su Kui Sheng (蘇桂昇)、Sui Kwai Chan 【T】 Tan Ai Lak (陳愛麗)、Tan Boon Liang (陳文亮) (2)、Tan Chaik Kwang (陳澤光)、Tan Chee Kiong (陳志強)、Tan Chee Teong (陳治中)、Tan Cheet Yong (唐志勇) (2)、Tan Chew Mooi (陈秋妹)、Tan Hwee Ing、Tan Keah Moh (陳佳茂)、Tan Kee Hang (陈继汉) (3)、Tan Pang Tee (陈邦智)、Tan Peck Ming (陳碧明)、Tan Peck Ming (陳碧明)、Tan See Seng (陳時生)、Tan Soo Sin (陳素芯)、Tan Wee Pin、Tan Wee Seng (陈为胜) (2)、Tang Eng Huat (陳永發) (2)、Tang Gek Eng (陈玉英)、Tang Kok Lian (湯国亮) (3)、Tang Miow Chin (湯妙晶)、Tay Kiam Guan (鄭謙源)、Tee Choon Hong (2)、Tee Kian Meng、Teh Chong Yee (鄭忠義) (2)、Teng Kim Yin (鄧錦雲)、Teo Bee Hong (張美宏)、Teo Boon Lian (張文連)、Teo Chuan Soon (張川順)、Teoh Eng Choo (張映水)、Teo Kian Song、Teo Kim Chuan、Teo Kwee Swee (张贵水) (2)、Teo Tiam Hwa (張添華)、Teoh Eng See (張映絲)、Tey Khern (郑勤)、Tey Kian Teong (鄭建忠)、Tham Kok Who、Thye Meng Yu (鄭茗友)、Tiang Chuan Seong (鄭俊雄)、Toh Leong Chee (卓良志)、Toh Peng (杜平)、Ung Yat Keat 【W】 Wong Chao Hsiung、Wong Chee Ken (黃啓耕)、Wong Chin Shiuan (黃晋軒) (2)、Wong Choon Leng、Wong Fee Ping (黃慧萍)、Wong Jiunn Shyong、Wong Ka Seng (王家成)、Wong Kim Choy、Wong Kim Choy、Wong Kok Hoi、Wong Kuok Hung (黃國鳳)、Wong Mei Kin、Wong Seng Keng (黃成耕) (2)、Wong Sheong Chin (黃錄进)、Wong Tzong Chyang (黃宗強) (2) 【Y】 Yap Men Fatt、YB Liang Teck Meng (梁德明)、Yeung King

Hong、Yew Kuen Ying (姚群英)、Yew Siew Leong (姚瑞良)、Yong Chin Chew (楊清洲)、Yap Geng Yi (叶耿瑜)、Yong Hwee Yan、Yap Shin Woei (葉信偉)、Yew Siew Leong (姚瑞良)、Yong Cheng Yun (楊青雲)、Yong Hon Wee (楊漢威)、Yong Kian Teck (楊建德)、Yong Kok Lin (楊国霖)、匿名希望 (1)

(B) 坂東慶彦 (F) 藤田陽一、深民崇夫 (G) 五条章二 (I) 石原政一、伊藤要、稲田幸司 (K) 越場直樹、工藤英弥、河野修、小松電機産業 (株) 代表取締役小松昭夫 (M) 水田康広、水野伸明、森下治幸 (O) 大須賀稔晴、貞包物産 (株) (S) 柴田保、下村安秋、白石和也、SKK Kaken (M) Sdn Bhd (T) 田中公治、塚本秀幸 (Y) 山内一弘、山川勇人、山縣みさ、山根行弘

ミャンマー Aung Kyaw

パキスタン A. R. Siddiqi (在日)

ペルー Olga Shimada Keiko (在日)

シンガポール Chia Guan Sey (謝元生)、Foo Choo Wei (在日)、Foo Yong Tse、顔尚強、王癸其、Tan Choon Shian、Wong Meng Quang

台湾 Chen Ai Chi (陳艾圻)、張忠信 (在日)、李淑維 (維維)、Lin Pi Chi (林丕繼、2、在日)、林登居・斎藤ヒサ子 (在日)、Liu Li Mei (劉麗美)、堤井信力 (在日)、廖婉淑、陳俊銘 (在日)

タイ 【A】 ABK and AOTS Alumni Association (Thailand)、Asami Hiroko (浅見博子、在タイ) 【B】 Bandihit Rojarayanont 【C】 Chamlong Srimuang、Chanintorn Mekaratana、Chovet Yimsirikul 【D】 Ditdi Chatputtongul 【G】 Gannigar Koontanakulvong (2) 【I】 Itti Rittaporn 【K】 Kanzaki Sorda (在日)、Kornkeo Praisontarangkul、Kraisorn Throngnymphai (在日)、Krisada Visavateeranon 【M】 Meena Thamchaipenet、Mongkol Pianapitham 【N】 Navarat Srisuponvanit、Ngampho Patrawut、Niramai Thanatavee 【O】 Onozaki Tadashi (小野崎忠士、在タイ) 【P】 Patamavadee (Bongsayan) Narushiso、Phiphat Chaichanavichakij、Pilaipan Mekaratana (2)、Pisan Thanatavee、Pholchai Limviphuvadh、Pornanong Niyomka H.、Prayad Kongkasawad、Prayoon Shiowatana 【S】 Sathida Mekaratana、Saowanee Patrakarn、Shintaku Hikaru (新宅光、在タイ)、Sivaporn Sirilattayakorn、Sucharit Koontanakulvong (2)、Suchittra Hunbunchakit (2)、Supong Chayutsahakij、Suthee Chutchaiwett、Suvit Vibulsresth 【T】 Technology Promotion Association (Thailand-Japan) (TPA; 泰日経済技術振興協会)、Thai-Nichi Institute of Technology (TNI; 泰日工業大学)、Tana Tangtrongsakdi 【V】 Vachirane Limviphuvadh、Vachiraporn Limviphuvadh、Vilai Tomorakul、Virat Thiravathanavong 【W】 Wannadee O'sorup、Wiwut Tanthapanichakoon 【Y】 Yanase Shuzo (柳瀬修三、在タイ)、Yoshiko Limviphuvadh

ベトナム Dao Thi Minh (在日)、Dong Du (ドンズー日本語学校)、Le Quynh Chi、Nguyen An Trung、Tai Anh Tien (在日)、To Buu Luong (在日)、Tran Thanh Viet (在日)

ABK 関連書籍のご紹介

啄木と「昴」とアジア

ラビシャンカールのシタール響く

◆ 小木曾友・沢木あや子（歌と文）著

◆ 価格 定価 1,260 円（本体価格 1,200 円＋消費税）

<目次> 啄木と昴とアジア・・・小木曾 友 / 短歌通信 1 〈ヘップバーンのごとく老いたし〉 2 〈キャベツは黄色い花を咲かせたり〉 他
歌とエッセイ・・・沢木 あや子 / 1 〈歌アンソロジー 1984 - 2007〉
2 〈故郷・家族を詠う〉 3 〈アジアを詠う〉 4 〈雲南を詠う〉 5 〈遺詠〉 6 〈斉藤史の一首〉 他、「アジア文化会館の食堂」・・・小木曾 史子、「病床の穂積先生」
・・・小木曾 史子、「穂積五一とアジア文化会館」・・・小木曾 友



響き合う啄木と「昴」。アジア留学生との交流 50 年。アジアに多くの知己をもつ著者二人が綴る清冽な短歌とエッセイ。谷村新司の名曲「昴」は啄木の歌にインスパイアされて生まれ、啄木の歌は「昴」のメロディに乗ってアジアに広まっていった。

◆ 著者略歴

小木曾 友：（財）アジア学生文化協会理事長。1934 年東京生まれ。東京大学大学院修士課程（農芸化学専攻）修了。学生時代から、穂積五一氏の主催する新星学寮・アジア文化会館（東京都文京区）での留学生との共同生活を経て、1962 年（財）アジア学生文化協会入職。アジア文化会館を拠点にアジア留学生の生活・勉学の支援に取り組む。短歌結社竹柏会「心の花」会員。

沢木 あや子：本名、小木曾史子。歌人、短歌結社竹柏会「心の花」会員。ペンネーム：沢木あや子。書道家・号青壺、「書象会」無鑑査会員。1929 年長野県佐久市生まれ。野沢高等女学校（現野沢南高等学校）卒業。2007 年没。享年 78 歳。夫の小木曾友とともにアジア文化会館を拠点として、アジア留学生の生活と勉学の支援に取り組む。

ご購入の方法：アマゾン、セブンネット、楽天ブックス、YesAsia.com などのオンライン書店、または、全国の書店を通じてお取り寄せ下さい。

出版社 HP：<http://www.v2-solution.com/booklist/fhqaj000000021io.html>

お問合わせ：Tel.090-2429-3032、Fax:049-263-7182 E-mail: bxh04076@nifty.com（小木曾）

おたより

アジアの友 1-2 月号、興味深く拝見しました。座談会も面白かったですが、奥様（小木曾史子さん）の書かれた一文（「アジア文化会館の食堂」—『啄木と「昴」とアジア』にも収録）には心がこもっていて、とても感動しました。アジアの友人達一人一人の心を察しながら、メ

ニューを考えたりしておられた史子さんの優しいお心づかいがよく分かり、本当に優しい、『啄木と「昴」とアジア』の中の短歌「溢れいするかなしみこぼし十六夜の月山の端をゆらぎ昇れり」のような方だったのだですね。（小田中聰樹（東北大学名誉教授・新星学寮寮友））

年末には、ご著書『啄木と「昴」とアジア』を、また今回『アジアの友』では、小倉さん、史子夫人のコラム文も読ませていただきました。大学卒業後10年ばかりの頃、「小木曾君、いつまで続くか」と思ったことがありましたが、今は、「真直な一本道、しかも心豊かな一本道を歩んでおられる」と感動を覚えます。〈倉内憲孝（元住友電気工業（株）会長・新星学寮寮友）〉

皆様、今年も宜しく申し上げます。同窓生募金は2010年から2年間で完成させる予定でしたが、2013年になってもまだ5千万円の目標が達成出来ず、残り約3百万円になっています。このFBをご覧ください。なされている方々に、再度一人5千円または1万円のご協力を頂き、この活動をうまく「完成させませんか？」と、お願いしたい気持です。どうか宜

しく申し上げます。〈2013/1/10 マレーシア Foo Hee Hiang〉

前略 今年の冬はことのほか寒いですが、理事長にはお元気のご様子なによりです。現在程アジア学生文化協会の存在と活動が必要な時はないと思っています。太田記念会館でお知り合いになり、こんな素晴らしい協会と人達と交流ができるようになった事を喜んでいすし感謝しています。本当に力のない一市民ですが、まだまだがんばっていきたいと思っています。日本語学校で集う若い人々がアジアのために大きな力になることを願っていますしそうなると信じています。理事長はじめ皆様の益々のご健勝をお祈り致すと共に協会の益々の発展とアジアの連帯が進むことを願っています。新校舎の一日も早い竣工を願っています。〈山海保〉

2013年2月28日（木）マレーシア・ジョホールバルで第9回四木会が開催されました。女性が増えてきて楽しい会になってきました。



ご入会とご寄付のお願い

当協会は、政府の補助金を受けていない純民間運営の公益法人ですので、財源に限りがあり、皆様方からお送りいただく会費、寄付金は、本協会の活動を支える貴重な財源となっています。何卒ご理解、ご協力をお願い致します。

協会のあらまし

名 称：財団法人アジア学生文化協会

ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASCA)

所在地：東京都文京区本駒込2丁目12番地13号

代表者：理事長 小木曾 友

設 立：1957年（昭和32年）9月18日
故穂積五一氏創設

目 的：日本とアジア諸国の青年学生が共同生活を通じて、人間的和合と学術、文化および経済の交流をはかることにより、アジアの親善と世界の平和に貢献することを目的とする。

◇主な事業◇

- (1) 留学生宿舍の運営
- (2) 留学生日本語コースの運営（進学希望者向けの日本語を中心とする教育）
- (3) 留学生に対する情報提供支援
- (4) アジア語学セミナー
- (5) 帰国留学生のアジア文化会館同窓会、(社)日・タイ経済協力協会、ABK留学生友の会との連携・協力

◇会費（年額）◇

正会員 1口 1万円
賛助会員 1口 5万円
特別会員 1口 10万円

会員には広報誌「アジアの友」が無料配布されます。また、広報誌購入だけを希望される方には、購読料年間3千円（学生2千円）でお送りしています。

本誌で広告してみませんか。

団体・企業を問わず、編集部へご相談ください。

後 記

早いものでTPA設立から40年が経った。日本の対外援助のモデル事業といわれるまでに成長した。これは、ひとえに穂積先生がその設立に当たって守りぬいた「タイ側の自主性に委ねる」事業をタイ側に任せ、それにタイ側が答えた結果であろう。この40年間に当財団もたくさんの若き職員をTPAへ送り出しその歴史の一端を担いかつその中で育てていただいた。そのTPAは、またその歴史の中で大学をつくるという大事業を成し遂げ、スタートから4年、すでに各方面から注目を受けている。(F)

2012年、長いこと鎖国状態にあったミャンマーが民主化に動き出し門戸を開いた。これまでは、限られていた留学生の数も今後増加すると予測される。ミャンマーで唯一公認の元日本留学生協会(MAJA)現会長ミンウェイさんのABK米館に際し、MAJAの活動概要を紹介する。(F)

2011.3.11、突如東日本を襲った巨大地震と津波。もうすぐ2年になるが、大惨事を引き起こした東日本大震災は、被害が広範に及んでいることもあり、その復興はどのくらい進んでいるのか把握できない。当財団を長年ご支援下さり気仙沼に在住する栗原さんに、現地で暮らしてのその後の気仙沼の様子をご寄稿いただいた。震災直後、気仙沼湾を囲むいくつかの山が火に包まれ長時間燃え上っていた映像は、この世の現実とは思えず未だに鮮烈に記憶の中に残っている。(F)

アジアの友 2013年 2・3月号

2013年2月20日発行（通刊第501号）

年間購読（送料共）3,000円（学生2,000円） 1部 500円（税込）

発行人 小木曾 友
編集 アジアの友編集部
発行者 財団法人 アジア学生文化協会
東京都文京区本駒込2-12-13 (☎113-8642)
電話番号：03-3946-4121 ファクシミリ：03-3946-7599
振替口座：00150-0-56754 E-mail: tomo@abk.or.jp
ホームページ：(<http://www.abk.or.jp/>)
published by ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASIA BUNKA KAIKAN)
2-12-13, Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8642, JAPAN
☎+81-3-3946-4121 ☎+81-3-3946-7599
Email: tomo@abk.or.jp
Home Page: <http://www.abk.or.jp/>

「アジアの友」の購読会員（年3,000円・学生2,000）にご入会下さい。振替用紙又は電話等にて。

「ABK 同窓生募金」へのご協力をお願い

(財) アジア学生文化協会では、現在、下記の通り、「ABK 同窓生募金」を行っています。おかげさまで、沢山の同窓生、関係者のご協力を賜り 2012 年 12 月末までに約 4,700 万円の募金を集めることができました。これもひとえに皆様の御協力の賜と存じます。目標の 5,000 万円まであと一息です。新校舎の完成を予定している 2013 年 3 月末までにぜひとも皆様のお力をおかりして目標を達成することを願っております。つきましてはまだご協力をいただいていない沢山の同窓生、関係者にご賛同とご支援をいただきたく、改めてお願いいたします次第です。なお、この度の「ABK 同窓生募金」への寄付者のお名前は、金額の多寡にかかわらず新校舎に掲げる銘板に刻印し、長く保存させていただく予定です。世界的な不況の折、真に心苦しい限りですが、何卒、ご理解とご協力をくださいますようお願い申し上げます。

財団法人アジア学生文化協会 (ASCA)

理事長 小木曾 友

募金内容

- | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|---|-------|------------|------|-----------------|------|----------------|-----|----------------------------------|--------|---------------|------|----------------|
| 1. 名 称 | 同窓生募金 | | | | | | | | | | | | |
| 2. 目標額 | 50,000,000 円 (伍仟萬円也) | | | | | | | | | | | | |
| 3. 寄付金額 | 一口 10,000 円 <一口未満でもお受けします。但し、一口未満の時は 1000 円以上でお願いします> | | | | | | | | | | | | |
| 4. 使 途 | ABK が設立する学校法人の「運営資金」に当てる (注)
(注) 学校設立には、校舎建設資金 (約 5 億円) のほかに、教育の健全性を保証するために「運営資金」 (約 5,000 万円) を所有することが必要です。募金はそのためのものとします。 | | | | | | | | | | | | |
| 5. 募金対象 | ABK と兄弟寮に居住したことのある各国 (在日を含む) 留学生・技術研修生・日本人学生の OB/OG (約 1,000 人)、ABK 日本語コースの卒業生 (約 4,000 人)、及び ASCA の日本人職員・会員等 (約 1,000 人)、並びに本募金趣旨に賛同されるすべての皆様 | | | | | | | | | | | | |
| 6. 期 間 | 2012 年 4 月 1 日から 1 年間 | | | | | | | | | | | | |
| 7. 送金方法 | 次の 1)、2)、3) のいずれかの方法で、ご送金下さい。
1) クレジットカード決済による送金 (下記ウェブサイトで手続きできます)
寄付のお申し込み http://www.abk.or.jp/abkd/fund/fund.html
* セキュリティ上の必要から、1 回の送金は上限 300,000 円 (参拾万円也) でお願いします。
2) 銀行振込みによる送金 (下記銀行口座にお振り込み下さい)
<table border="1" data-bbox="375 1275 1036 1404"><tr><td>銀 行 名</td><td>みずほ銀行 本郷支店</td></tr><tr><td>口座番号</td><td>普通預金 NO.2789045</td></tr><tr><td>口座名義</td><td>財団法人 アジア学生文化協会</td></tr><tr><td>住 所</td><td>東京都文京区本駒込 2-12-13 ☎ 03-3946-4121</td></tr></table>
3) 郵便振替による送金
<table border="1" data-bbox="375 1451 810 1522"><tr><td>郵便振替口座</td><td>00150-0-56754</td></tr><tr><td>加入者名</td><td>財団法人 アジア学生文化協会</td></tr></table> | 銀 行 名 | みずほ銀行 本郷支店 | 口座番号 | 普通預金 NO.2789045 | 口座名義 | 財団法人 アジア学生文化協会 | 住 所 | 東京都文京区本駒込 2-12-13 ☎ 03-3946-4121 | 郵便振替口座 | 00150-0-56754 | 加入者名 | 財団法人 アジア学生文化協会 |
| 銀 行 名 | みずほ銀行 本郷支店 | | | | | | | | | | | | |
| 口座番号 | 普通預金 NO.2789045 | | | | | | | | | | | | |
| 口座名義 | 財団法人 アジア学生文化協会 | | | | | | | | | | | | |
| 住 所 | 東京都文京区本駒込 2-12-13 ☎ 03-3946-4121 | | | | | | | | | | | | |
| 郵便振替口座 | 00150-0-56754 | | | | | | | | | | | | |
| 加入者名 | 財団法人 アジア学生文化協会 | | | | | | | | | | | | |

* 振替用紙は「アジアの友」に挟み込まれています

お問合せ先: (財) アジア学生文化協会 50 周年記念事業委員会事務局

〒113-8642 東京都文京区本駒込 2-12-13 アジア文化会館

Tel.+81-3-3946-4121 Fax.+81-3-3946-7566 E-mail: asca50com@abk.or.jp